

# 東方黒雷伝

chaco

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

どうも初めまして。chacoというものです。

この話は記憶を失った少年が幻想郷で戦うお話になります。

週に1, 2本、投稿を目指しています。

この作品は一応処女作です。

そのため、駄文になっていると思われる。

誤字脱字も気を付けてはいますが、出てくるかもしれません。

その時は、感想欄やメッセージを感想やアドバイスなどと一緒に教えていただけると嬉しいです。

pixivにて友達と連載中の小説のURLを貼っておきます。よかつたら見ていってください。

<https://www.pixiv.net/novel/member.php?id=23454406>

この作品が、少しでも皆様の暇つぶしにならんことを。

# 目次

プロローグ	脱走	1
1話	名前	3
2話	能力判明	7
3話	初めての空	12
4話	1日の終わり	18
5話	練習	26
6話	模擬戦と妖刀	32
7話	晩御飯とその後	39
8話	スペルカード	45
9話	挨拶	52
10話	宴会	59
11話	依頼	64
12話	買い物	69
13話	少女	76
14話	紅魔館	82
15話	過去	88
16話	紅魔館	95
17話	vsレイナ①	100

## プロローグ 脱走

サイレンと怒号、銃声が鳴り響く中、少年は己の持つ力すべてを使って逃げていた。

「被験体108が脱走しました。研究員は直ちに脱走者を無力化してください。繰り返します。被験体・・・。」

無機質な女性の声自分が捕縛しよう急かしている。

「早くあいつを捕らえろ!!最悪死んでも構わん!!絶対に外に出すな!!」

研究員も相当焦っているようだ。

それもそのはず、少年は既に出口を目視できる位置にいる。このまま走り去ればすぐに外に出られるだろう。

少年は笑った、ついにこの地獄のような場所から出ることができると。

ここに連れて来られてから毎日のように他の被験者と殺し合いをさせられ、その後は身体を弄くられた。

ここに来た時は憶えている。はじめは来る前のことも憶えていた。しかし、身体を弄られるたび記憶は無くなっていった。

今では親の名前はおろか、自分の名前もわからなくなってしまった。

半年前ほどからついには自意識すらも無くなってきているものも出てきた。

だが、記憶と引き換えに得たものもあった。

それは、戦うための力だった。

その力とは身体能力の上昇と放電だった。

そのおかげで少年は逃げ続けることができている。

現に今も少年の周囲には黒く、小さい雷が少年に当たりそうな銃弾を防いでいた。

しかし、一度放電するたびに体力がどんどん削られていった。その証拠に少年の呼吸は荒くなる。

それでも少年は走るのをやめなかった。

地獄のような場所を出るために。自由を手にするために。  
そうして少年は外へ出るための扉を蹴破り、外へ飛び出した。

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——

少年は近くの森を走りつづけていた。

少ないが追手をまくために走りづらい森を全力で走っていた。

そのおかげか、追ってきていた奴らはもう見えなくなっていた。

少年はそれを確認した後、木の根元にある大きな茂みに隠れた。既に体力は限界で休みたかったのだ。

茂みに隠れた後、周りの様子を確認した。

「あの野郎、どこへ行っただんだ。」

「まだ近くにいるかもしれないねえ。」

「とりあえず、先に進んでみるか。」

そういつて、奴らは奥へと行った。

その様子を確認した少年は安心して大きく息を吐いた。

そして、そのまま木に背中を預けて眠りについた。

注がれている視線に気付かずに……。

そして、少年に視線を向けている者はどうと……

「彼、面白そうね。」

食べ物を取りに来ただけけれども、これは思わぬ拾いものね。」

そういつて少年のもとへ移動し、少年を抱いたまま、スキマの中へ消えていった。

## 1話 名前

「んっ、・・・？」

目が覚め、視界に入ったのは知らない天井。

大体3秒ぐらい天井を見上げ、体を起こし、部屋を見渡す。

「んっ、どっか？」

わかったのは和室ということぐらい。

自分の最後の記憶は森の中にいたことだし、ここに来た覚えは全くない。

とりあえずどうするか考えていると、目の前のふすまが開いて猫耳の少女が顔をのぞかせた。

後ろには2本の尻尾が見える。

身体を改造されたおかげで幻覚まで見えるようになったのか、なんて考えながら目をこすっている間に少女は、「紫様ー、起きましたよー!!」と言っ走って行った。

その時、やっぱり尻尾は2本見えた。

猫耳少女が誰か呼びに行ってから少しすると、一人の女性が来た。このヒトが紫というヒトだろう。

あまりにも綺麗でしばし、見惚れしまっていた。

「どうも初めまして。私はこの主、『八雲紫』というものでございます。」

紫さんの声で我に返る。そして、急いで挨拶を返す。

「は、初めまして。えっと・・・」

そして、紫さんに何を聞いたらいいいのか焦りながら考えていると。

「見知らぬところで混乱してると思われますのであなたがここに来た経緯についてお話させていただきます。」

と言っ教えてくれた。

「先日、森で食べ物を探していた時に、あなたが倒れているのを見っけ、保護させていただきました。」

「あ、ありがとうございます。」

「いえいえ、お気になさらず。幻想郷はすべてを受け入れますから。」

そこで、聞きなれない言葉が出てきた。

「? 『幻想郷』って何ですか?」

「はい、『幻想郷』とは、忘れられたものたちが流れ着く場所でございます。あなた方がいた場所とは結界で隔離され、内側から外側を見ることができず、外側から見ることができません。また、基本入ることができませんし、出ることもできません。」

そのことを聞いて心の中で歓喜した。

これで奴らから完全に逃げ切ったと。

しかし、同時に疑問も出てくる、なぜ自分は入れたのかと。

そして紫さんは、

「そのことはまた後で説明させていただきます。」

と、まるでこっちの心を読んだかのように言った。

「ところで、今後どうします? 残ることもできますが、向こうにかえすこともできますが。」

そんなん決まっている。残れるなら残りたい。

向こうに未練はないし、あるのは身体を改造された記憶だけだ。

それに、出入りもできないようだから奴らも来ないだろう。

「残れるのなら残りたいです。」

「いいのですか? こっちには妖怪などの妖といった類のもの出るため命の保証はできませんが?」

むう、死んじやう可能性もあるのか。

でも、奴らのおかげである程度は戦えるから大丈夫だろう。

「多分、大丈夫だと思います。」

「ふふ、わかりました。幻想郷はあなたを歓迎します。」

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——

「はあ、もう疲れるからやめるわね。」

「なにがですか?」

「口調よ。外の人間にはつくっているのよ。」

でも、もうあなたはこっちの人間だからつくらなくてもいいわよね

♪

「はあ」

すごい丁寧に話していたが実際、とても話しづらかった。

そのことを告げようと口を開こうとするが、紫さんの質問で口を閉じてしまった。

「ところで、名前を聞いていなかったわね。」

「・・・ないんです、名前。とある施設で『108番』と番号で呼ばれていました。」

必然的に顔が暗くなってしまった。紫さんも気にすることないのに。

「別に気にしないでください、大丈夫なんです。」

「嫌なことを聞いたわね。ごめんなさい。」

やっぱり気にしてしまうか・・・本当に大丈夫なのに。

「いえいえ、本当に大丈夫なんです。」

「そう、でもやっぱり名前がないと不便ね。番号で呼ぶのも嫌だし、私があなただの名前を付けましょう。」

「そうねえ・・・。」

「そういつて紫さんは10秒程考え、「決めた！」と声を上げた。」

「あなただの名前は『黒風透夜』。」

「透き通ってる黒い目に穏やかなそうな性格だから大体そんな感じね。どう、気に入ったかしら？」

「はい、とても良いと思います。ありがとうございます。」

「気に入ってくれてよかったわ。」

「そういつて紫さんは笑った。」

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————

「それじゃあ改めて、スキマ妖怪の『八雲紫』よ。妖怪の賢者なんて呼ばれたりしているわ。能力は『境界を操る程度の能力』。これからよろしく願いますわ。」

「ん？能力って何？それに妖怪ってさつき話していた奴？」

「はあ？紫さん妖怪だったんですかー？えっ、でも。」

「ええそうよ。それも大妖怪よ。そこら辺の妖怪とは格が違うのよ。それに、中級以上になると大体の妖怪がヒト型になれるわ・・・それにしても、いいリアクションだったわね。」



そりやあ驚きますよ。いま、目の前にいるヒトが妖怪だって知ったら、それも大がつくほどの妖怪だったら。

「あと、気になっていると思うけど、能力についてはまた後で説明するわ。」

それと、敬語も『さん』付けもいらないわ。」

そういつて右手を差し出してきた。

『黒風透夜』です。まだまだ分からないことだらけですが、よろしくお願ひします。紫さん。」

紫は敬語を取ってくれないことに不満を持っているようだが、気にしないで紫の右手を強く握り返した。

## 2話 能力判明

「どうして敬語をやめてくれないのかしら?」

紫は若干悲しげに言った。

「すみません。俺、あまり人と話さかったので誰に対しても敬語になっちゃうんですよ。」

まあ、慣れてくれば自然と取れているんですけど……。」

「そう。なら、なるべく早く取るようにしなさい。」

幻想郷の人たちは殆どが『敬語じゃなくていい。』って言うからね。」

「ぜ、善処します……。」

そういつて一応は納得してもらった。

敬語、なるべく早く取らなくちゃな。

「それじゃあ、透夜が気になっていると思う『能力』について説明するわ。」

気になっていた能力についてやっとなわかる。

「はいはい、ちゃんと教えるから少し落ち着きなさい。」

いい? 能力っていうのは、そのヒトの使える力みたいなもので、持ってるヒトもいれば持っていないヒトもいるわ。」

「能力って幻想郷でしか使えないんですか?」

「いいえ、外の世界でも無意識に使っている人もいるわ。」

透夜もその一人だと思うわ。」

「持てる能力って一つだけなんですか?」

「そうね、普通一つだけよ。」

「そうなんですか。」

残念だ。せっかく能力を使えると思ったのに、改造されて得てしまったものが既に能力だったなんて。

「もしかしたらあるかもしれないわよ、2個目の能力。」

「えっ、どういうことですか?」

「透夜は普通じゃないからね。」

自分でも普通じゃないことは知っているが、ヒトに言われると少し凹む。

「能力を使うには『靈力』、『妖力』、『神力』、『魔力』といったものが必要なのよ。

普通、人間には靈力、妖怪には妖力、神様には神力といったものを少なからず持っているの。魔力はまた別だから省くわ。

それで、透夜からは靈力と妖力の2つを感じるの。

使い方はほとんど変わらないけど、性質は全く違うの。

そのうち、妖力のほうは明らかに透夜のものじゃないものよ。」

「つまり、今使えるのは靈力か妖力のどっちかの力で、もう片方にも能力があるかもしれない。っていうことですか？」

「そういうことよ。あくまで『もしかしたら』だけだね。」

やっぱり、自分の力が使えるなら、得てしまった力じゃなくそっちを使いたい。

「それで、どうやったらわかるんですか？」

「ちよっと待っててね。・・・はい、これ。」

これに靈力を流してみて。」

そういつて紫は眼がたくさんある不気味な空間から1枚の紙を渡してきた。

だが一つ困ったことがある。

「えっと、靈力ってどうやって流すんですか？」

「あら、知らないのね。それじゃあ教えてあげますわ。」

まずは体の内側に流れている靈力を感じなさい。

透夜の場合、妖力もあるけど明るいほうが靈力よ。」

紫に言われた通り、自分の体に集中する。

すると、すぐに自分の中に何かが2種類流れているのを感じられた。

一つは暗い黄色、もう一つは白に近い灰色。明るいほうが靈力って言ってたから白いほうに意識を向ける。

「それで感じるこゝろができたら、それを流したいところに集める感じね。」

言われた通りにやってみると少ないが右手に集められていくのがわかる。

「手に霊力を集めたら、渡した紙に少しづつ流していくの。

目安は紙が光るぐらいね。」

そして、まるでコップに水を注ぐように、紙に霊力を流し込んだ。すると紫が言った通り、紙が光り始め、文字が浮かんだ。

『空間を把握する程度の能力』

これが霊力を使ったときの能力なのだろうか？

「へ〜。これがあなたの能力なのね。」

いつの間にか紫が後ろから覗き込んでいた。

やっぱりこれが俺の能力のようだ。

「なんか、地味ですね。」

「確かにそう感じるけど、能力っていうのはいろいろと応用が利くわ。それに、常時使えるみたいで霊力の消費も少ないみたいね。」

そう言われ、眼を閉じ、能力を意識してみる。

「ほんとだ。この部屋に大体何があるかわかります。」

そして、目を開く。

「よかったわね。使いやすそうな能力で。」

とりあえず使っていれば、どう応用できるかもわかってくるわ。」

「わかりました。なんか霊力も減っていないみたいなんで常時使っておきます。」

「それがいいわ。あと妖力も操る時は同じ感覚で使えるわ。」

まあ、妖力のほうは意識しなくても使えるようだけど。」

「そうみたいです。」

「妖力も霊力もやればやるだけ短時間で一度に集められる量も多くなるわ。使えるなら使いなさい。」

「わかりました。」

それならできるだけ使っていこう。

霊力は少しだが、常時使っている状態なので、特に妖力を重点的に使っていこう。

「まあどうせすぐに嫌というほど使うことになるわ。」

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——

・・・へ？

「えっ、どういう意味ですか？」

「どういう意味もそのまんまよ。」

いや、わかるよ、それくらい。

「だけど、聞きたいのはなんでそうなるかってことなんだよなあ……  
「なんでって、あなた行くところないでしょ。」

「だからここに住んでもらって、ついでに強くなってもらおうと思っ  
て。」

「いやいや、助けてもらったのに住んでいいっていうのは流石に……。」「  
嫌なら別にいいわよ。」

でも行くところないんでしょう。」

ぐっ、痛いところついてくる。

……でも、確かに寝泊りできる場所がここ以外ないんだよなあ。

「でも、流石にお世話になり過ぎな気がするので恩を返せないです。」

「別にいいわよ。恩なんて。」

「いや、俺が嫌なんです。」

お世話になった人に恩を返せないのは。」

そうだ、助けてもらって、お礼ができないのは嫌だ。

ましてや、そのお礼ができてないのにお世話になるなんて……

「私は別に気にしないけど……それじゃあ、

透夜、あなた、私の従者になりなさい。」

「……はっ。」

えっ、従者？

「なんで。いや、確かに俺は借りを作るの嫌って言ったが流石に了承  
しかねるぞ。」

「ごめんなさい。今のじゃ語弊があるわね。」

つまり、できるだけ私のお願いを聞いてってこと。」

「なるほど。できるだけっていうのはその願いをやるかやらないか  
決めていいってことですか？」

「そうね。そういうことよ。」

まあそれぐらいだったら出来るだろう。

「わかった。俺にできることならやりますよ。」

これからお世話になります。」

「ええ、よろしくね。」

こうして、しばらくの間、紫の家に住むことになった。

「あと、紙をもう一枚渡しておくから妖力のほうも調べておきなさい。」

### 3話 初めての空

俺は一人で外にいた。多分庭だろう。

紫はというと、

「ちよつと、一人呼んでくるから先に外に行つててちようだい。」

つて言つて眼がたくさんある空間を経由して俺を外にほっぽり出した。あれが紫の能力なのか。でも確か『境界を操る程度の能力』じゃなかったっけ？

それにしても空間把握が追いつかないのか若干頭いてえ……。紫に俺には使うなつて言つておこう。便利だけでも。

そんなことを考えていると、狐の尻尾を九本持った女性と何故か萎れている紫がこつちへ来ていた。

「すまない、遅くなった。」

「は、初めました。黒風透夜といいます。」

「私は紫様の式で九尾の『八雲藍』だ。紫様からある程度聞いている。これからよろしくな、透夜。」

「よろしくお願いします。」

とりあえず簡潔に挨拶を済ませ、少し気になっていることを聞いた。

「ところで藍さん、紫に何があつたんですか？」

すると、藍さんはため息をついて話した。

「いや、さつきまで紫様に頼まれた仕事をしていたんだが、

紫様はほとんどの仕事を私に押し付けて自分ではほとんどやらな  
いからな……。そしてさらに私に『透夜を師事してほしい。』つて言  
われて少し怒つてしまったんだ。まあ、紫様の式だから仕方ないのだ  
が……。」

「なんかその、すいません。」

「いやいや、透夜のせいではないよ。」

紫様がしつかりと仕事をしてくれればいいだけだから。」

そういつてまた、ため息を吐いた。

「あと私のことは藍でいいぞ。」

そのうち一緒に仕事もするだろうしな。」

「はい。」

「よし、それじゃあ早速やっていくか。」

早速修行を始めようとしたとき、紫が聞いてきた。

「その前に、透夜はなんか使いたい武器とかあるかしら。」

「ぶ、武器ですか？」

「そ、武器よ。あると妖力とかの節約ができるし、いろいろな戦い方ができると思うけど、どうかしら？」

うーん、武器かあ。確かにあったほうがいろいろな戦法ができるなあ。向こうでも何度か使った戦闘をやったし。

あの時使いやすかったのは確か……。

「それなら、刀つてやつを使いたいです。」

「わかったわ。あなたが修行している間に探しておきましょう。」

「ありがとう、紫。」

「これくらい別にいいわ。これからあなたにも仕事を頼めるんですから、これくらいどうってことないわ。」

それじゃあ早速探してくるから始めちゃていいわよ。」

そういつて紫はあの空間を作り、中に入っていった。

「それじゃあ、始めようか。」

ところで、紫様に幻想郷での戦い方は聞いたか？」

「い、いえ。何も聞いてないです。」

「はあ、まったく紫様は……。」

せめてそこは教えておいてくださいよ。」

そう言つて何度目かのため息を吐いた。

紫にはいろいろと苦労してそうだ。

「幻想郷では『弾幕ごっこ』というもので勝敗を決める。これは人間と妖怪の差を埋めるために巫女によって考案されたものだ。あくまで遊びのようなものだから殺されることなんてほとんどない。まあ、弱すぎたりすると死んでしまうこともあるが……死なないようにするために私が透夜を育てるのだからな。安心していいぞ。」

良かった。とりあえず死ぬことはないみたいだ。



「でも、ほとんどいないがたまに無視して襲ってくる奴がいるがそれらは遠慮なく殺っちゃっていいぞ。」

一応それなりには戦えるようだしな。」

「わかりました。」

「よし、それじゃあ説明もしたし、やっていくか。」

ところで、透夜は飛べるか？」

空？そんなの決まってる。

まあ、確かに飛べたらいいなあとは思うけど。

「飛べないです。」

「そうか、ならまずは飛べるようになることからだな。」

じゃなきやまとともに弾幕もよけれない。」

「あの、さつきから言ってる弾幕って何ですか？」

「ああ、弾幕はだなあ」

そういつて藍は一つ、光でできたような球を作った。

「こんな感じの球を周囲にばらまいたものだな。」

弾幕ごっこは打ってはかわすを繰り返すものだな。

まあ、まずはかわせないと勝負にならないから先に飛び方を教えよう。」

こうして、八雲家での修行生活が始まった。

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*

「いいか、飛ぶ方法は2種類あって、霊力などを『勢いよく出す方法』と『調節して落ちないようにしたり進んだりする方法』だ。」

前者は勘単だが消費が激しく、勢いがあるから急に止まれないな。後者は多少難しいが慣れると自由に動けるな。消費も少ないし。

私としては後者を勧めるぞ。」

「それなら、後者ですね。」

自由に空を飛び回れるんだったら難しくてもそっちのほうがいい。普通、人間ができないことをやろうとしているのだから難しいのは当たり前前だ。

「よし、それじゃあ宙に浮くことから始めよう。」

そういつて藍は俺に近づき、しゃがんだ。  
俺が何しているのか疑問に思っている。

「早く乗れ。実際に空で練習したほうがコツをつかみやすいだろう。」  
藍は空へ連れて行ってくれるみたいだ。

だが、おんぶはちよつと・・・いや、ちよつとどころじゃなく恥ずかしい。

「わ、私だって恥ずかしいが、これが一番安全だからな。」

藍にそういわれ、顔を真っ赤にしながら背中に乗った。

心臓の鼓動が速くなり、若干体温も上がってきた。

これがおんぶでよかったと思う。

「よし、これぐらいの高さでいいか。」

もうついたらしい。結構早いもんだな。

「もう着いたんですか?」

「ああ、ちなみに高度は大体3000mぐらいだな。」

「3000ツ」

俺は思わず下を向いた。

今日は晴れていたから小さく薄い雲が下にある。

また、その下にある紫の家がゴマ粒に見える。

藍は俺を背中から放し、宙に浮かせた。

なんか俺のと違う妖力が纏わり付いているみたいだ。これが藍の妖力なのだろう。

「いいか?この宙に浮いている感覚を覚えるんだ。」

そしたら、自分の霊力が妖力でまねるんだ。」

今の感覚・・・しいて言うなら、纏っている妖力で上方向に重力がかかっているような感じだ。

「それじゃあ、徐々に妖力を少なくしていくからそれに合わせて自分でやってみろ。」

藍の妖力がだんだんと自分から離れていくのがわかる。

それに伴い高度も下がっている。

俺は今さつきまで感じていた感覚を思い出し急いで纏わせる。

しかし、なかなか止まらない。やっと止まっても藍によって支えら

れていた。

「やはりダメか。」

「すいません。」

「いや、謝ることはない。1日2日で出来るものでもないしな。

で、自分で纏わせた妖力はどんな感じだった？」

藍のは重力より強い力で上方向だけに引っ張っていた。

しかし、

「俺のは全面から力を受け、引っ張られて、力を相殺していた。」

「そこまでわかったのなら直ぐにできそうだな。」

予想外の返答に藍は驚いた。

普通、何回かやってわかるものだが、それを一度やっただけで理解したのだ。

(これは1週間ぐらいかかると思っていたが、すぐに使えるようになりそうじゃないか。)

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——

その後、透夜は何度か練習して留まるところまでできるようになった。

「藍、こんな感じか？」

今、藍は全く手助けしていない状態だ。

「驚いた。こんな短時間でここまでできるようになるとはな。

本当にすぐに使えるようになりそうだな。」

「そうだろ。」

よし！今度は移動だな。」

そして、透夜が練習を再開しようとした瞬間、

ぐう~~~~

と、鳴った。

太陽は既に沈みかけており、透夜の顔は夕日と同じぐらい赤く染まっていた。

「日も沈んできたし、そろそろ帰るか。」

「・・・はい／＼／＼／」

そうして、今度は藍の妖力に引っ張られて帰った。

## 4話 1日の終わり

藍と俺が地上に着いた時、ちやうど紫も帰ってきた。

「よっこいしょっと。」

あー、ちやうど透夜たちも帰ってきたの?」

「はい。」

今日は弾幕を教えるよりも先に、空の飛び方を教えていました。」

「それで、どうだったの。」

「すごいですよ、彼。」

妖力制御で空中にとどまるだけで? 3日かかると思っていたのですが、この短時間でそれくらいはできるようになりました。」

それを聞いた紫は満面の笑顔を作った。

「ふふ。流石、私が拾ってきた人間ではあるわね。」

そう言われるとこっちも照れてしまう。

しかし、一つ引つ掛かることがある。

「紫、拾ってきたってどういうこと?」

「そのまんまの意味よ。」

確かにあの人間たちから保護したっていうのもあるけど、それと同じくらいに自分のものでない妖力を使うあなたに興味が湧いたの。」

「じゃあ、俺が妖力を使えなかったら・・・」

「ええ、幻想郷には入れてたけど人里の近くに放ってたわ。」

あ、あぶねえー。使えてよかった。」

使えなかったらきつと今頃妖怪の腹の中だっただろう。

「でも、本当にあなたを保護して正解だったわ。」

面白いものも見れたしねえ。」

そう言つて紫はあの空間から四角い何かを取り出した。

俺は何を取り出したのか、と首を傾げると、それを見た藍は

「急にカメラなんて出してどうしたんですか、紫さ・ま・・・」

「カメラ?」

俺はカメラがどのような物なのか気になった。

多分、記憶を失う前は知っていたのだろう。どんなものかは忘れて



俺もここから離れたら一人暮らしになるだろうから参考にしよう  
と思い、台所に行こうとしたが紫に呼び止められた。

「透夜、ちよつとこつちに来て。」

俺は紫の正面に座った。

すると、紫はあの空間から一本の刀を取り出した。

「この刀を透夜にあげようと思うのだけれど、どうかしら？」

俺は紫の取り出した刀を手に取り、抜いた。

見た感じすごい綺麗だった。

刀身は光を一切跳ね返さないような黒。鞘は黒いが刀身とは逆に、  
鏡のように磨かれており、鯉口の下には刀身と同じような黒で小さな  
花が描かれていた。

「すごい綺麗ですね。」

「そうでしょう。」

「これの名前はなんていうんですか？」

「この刀は『月華』っていうみたいよ。」

なんか、その持ち主だった人たちが不自然な死に方をしていたこ  
とから妖刀って言われているみたいよ。」

「不自然な死に方ってどんなですか？」

俺はそう聞きながら、刀を手から放した。

「なんか発見されたときの様子としては、黒い花が死体を覆うように  
咲いているらしいわ。」

まあ、どれも死んだあとらしいからその刀に殺されるってことはな  
いみたいよ。」

「そうですね、それならありがたく使わせていただきます。」

そう言っただけは、再び刀を手に取った。

その様子を見た紫は嬉しそうにしていた。

「そうしてくれるとありがたいわ。」

そう言いながらあの空間から扇子を取り出し、口を隠した。

そして俺は紫に言いたいことがあったのを思い出した。

「そういえば紫、俺をあの空間で移動させないでほしいんだけど。」

「え、嫌に決まってるじゃない。」





俺も相当驚いているが、藍に尋ねた。

「あ、あの藍、なんでこんなに油揚げが多いんですか？」

「それは私が好きだからだ。」

いつもは紫様に制限されているが今日はちよつとした腹いせにだ。いつもはこんなに多くないぞ。

つと、せつかくの油揚げが冷めてしまうからそろそろ食べようじゃないか。

それじゃあ、いただきます。」

「い、いただきます。」

「いただきます。」

こうして俺たちは大量の油揚げを食べ始めた。

・・・ちなみに紫は食べ終わるまで顔が死んでいた。

—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*

今、俺は刀を片手に外にいた。

あそこにいた時に我流だが、武器として使う時もあったから、今回も刀を選んだ。

そして紫にこの刀を渡された時、なぜか自分の手にしっくりときた。

本当に刀を選んで正解だったと思う。

「でもお前、妖刀なんだよなあ。頼むから俺を殺さないでくれよ。」

そういつて俺は刀を抜いて素振りを始めた。

何だろう、この感覚。

刀なんてあの場所でも数回しか握っていないはずなのに振り方がなんとなくだがわかる。

少なくともあの場所じゃ感じられなかった感覚だ。

そんなことを考えていると一人の気配を感じた。

「何しに来たんですか、紫。」

そう言つて気配のするほうへ振り向くと紫がスキマから出てきた。



思い返せば、今日一日いろんなことがあった。  
初めてのことばかりで楽しい一日だった。

紫には助けてもらったし、感謝してもしきれないな。まあ紫なら「気にしないで」とか言いそうだけれども。

・・・ああ、早く強くなつて幻想郷中を回りたいな。

何があるんだろう。どんな人がいるんだ、ろ・・・う。  
そんなことを考えながら透夜は眠りについた。

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*

一方そのころ、施設では・・・

「あー、クソつ、どこに逃げやがたあの野郎。

このことがあの人に知られたら・・・。

あー、そもそもなんで捕まえられねーんだよ。ここには愚図しかいねーのかよ!!」

薄暗い部屋の中、一人の女性が声を荒々しく上げ、近くにあった椅子を蹴り上げた。

「というか、ホントにやべーな。このことがバレ「コンコン」ハア・・・あー入っていいぞ。」

彼女は嫌な予感がした。そしてその予感は的中していた。

部屋の扉が開き、一人の女性が姿を現した。

「レイナ様、主がお呼びです。すぐに主の元へ来てください。」

やっぱり今回のことで何かされるんだな。

「ユウナ、それは私だけか？」

「いいえ、他の御三方も召集されております。」

レイナは驚いた。

今回の件で叱られるんだったら自分一人だけだと思っていたからだ。・・・最も命があるかはわからないが。

「はあ、わかった。すぐ行く。」

レイナはそう伝えるとユウナは一瞬で消えた。

「そんじやまあ、叱られに行きますか。」

そういつてレイナは部屋を後にした。

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*

外の世界のとある場所に男女が三人ずついた。

一人男性が椅子に座っており、その隣にはユウナが立っていた。おそらく彼の秘書のようなポジションだろう。

そして、彼の前には残りのメンバーが跪いていた。

「今日、レイナが担当する東棟で脱走者が出た。」

その言葉で全員に緊張が走った。

「番号は108番、奴にはかなり強力なアビリティを入れたがまだ自意識が残っていた良個体だ。」

逃げた先は幻想郷。

お前らにはそこへ行って108番の捕獲、もしくは抹殺をしてもらう。

最悪、身体が残っていればいいからな。」

「そ、それで最初は誰が行くんですか？」

「お前だレイナ。お前のミスだからな。」

だが、捕獲、もしくは抹殺に成功すれば今回はお咎めなしだ。一週間後にお前を向こうへ送る。

皆ももしかしたら行くことになるかもしれないから戦闘準備だけしておけ。

それと、レイナがいない間、東棟はショウマ、お前に任せる。」

「はっ。了解しました。」

「おし、それじゃあ解散だ。」

くれぐれも脱走には気を付けろ。」

そして、解散の号令とともに彼らは、自分たちの担当区間へと戻って行った。

## 5話 練習

「おい、起きろ透夜。」

「ん〜。おはよう藍。」

俺は眼をこすりながら藍に挨拶した。

「全く、何時だと思っっているんだ。」

まあ、疲れていただろうししょうがないが。」

そう言われ、部屋に立てかけてある時計を見ると、すでに10時を回っていた。

「もう朝ご飯は用意してあるからそれを食べたなら飛ぶ練習をするぞ。」

藍はそう言っただけで部屋を出て行った。

俺はしばらく寝ぼけてぼーっとしてたが、次第に意識を覚醒させていった。

部屋を出ると朝ご飯が二人分おいてあった。

俺は顔を洗った後、部屋に置いてあった服を着、ご飯を食べ、刀を持って庭に出た。多分紫が昨日のうちに持て来てくれたのだろう。

ちなみに朝ご飯は普通に白米に魚の切り身だった。

庭に出るとすでに藍は来ていた。

「よし、それじゃあやってみるか。」

とりあえず、浮いてみる。」

「はい。」

俺は昨日やったように妖力を空中にとどまれるぐらい纏い、

それに加え上方向に引張ってみた。

するとほんの少しだが地面から足が離れ、そのままとどまった。

「こんな感じ?」

「ああ、上出来だ。それじゃあ昨日と同じぐらいの高さまで行くぞ。」

そう言っただけで藍は飛び立った。俺もゆっくりと藍について行った。

昨日の藍のように数秒とまではいかないが、大体1分ぐらいで着いた。

「よし、今日は自在に飛ぶ練習をするぞ。と言っただけでなく、進みたい方向に引張るだけなんだがな。」

「こんな感じ?」

俺はそう言いながら真横に身体をスライドさせた。

その時、若干バランスを崩して落ちそうになるが、何とかとどまつた。

「驚いたな。もうここまでできるなんてな。」

妖力に気を付ければもう自由に飛び回れるだろう。」

「ほんとですか?」

「ああ、だけでももう少し練習しておけ。」

そういつて藍は手のひらサイズの球を数個作り、一つとばしてきた。

いきなり攻撃してきたため、驚いた俺はギリギリでそれを回避する。

「ちよ、なんで攻撃するんですか。」

「いや、避けながら練習したほうが緊張感があつていいと思つてな。何、別に当たったら少し怪我するぐらいだ。」

なるほど、確かに緊張感が出るな。いや、でも。

「怪我はしたくないですよ。」

「なら、頑張つて避けることだな。それいくぞ。」

藍は笑いながらそう言つて球を作ると同時にとばしてきた。

それも数個を同時にだ。簡単な弾幕になつている。

「くっ、うわっ。」

俺は必死に避けていた。

実際球は少ないのでスペースはあるのだが、今日飛べるようになったので動きが大きくなつてしまう。

よつて、一つ躲せたとしても他の球に当たりそうになることが何回もあつた。

でも、少しずつではあるが時間がたつにつれて制御がうまくなつていくのか、当たりそうな球も減つていった。そのたびに球は増えているが。

そんな感じで1時間ぐらい続けられた。

弾幕を避け続けて1時間ぐらい経過したとき急に力が抜けるのを感じ、一瞬バランスを崩した。

すぐに体制を立て直したが、これ以上藍は撃ってこなかった。

「どうしたんですか？」

「これ以上は危険だから今日は戻ろう。お昼も近づいているしな。」

「俺、まだまだいけますよ。」

「さつきまでしつかり飛べていたのに急にバランスを崩しただろ。それは妖力が枯渇してきたからだ。」

透夜は靈力もあるがそっちまで失うと気絶してしまうからな。そうならないようにもこの辺で終わらせておいたほうがいい。」

「わかりました。それにしてもよく見えていますね。」

気付かれないように立て直したのに。」

「当たり前だろ、一応お前の師だと思っっているからな。」

俺はその言葉になんだか嬉しくなった。

「ありがとうございます。」

「いや、別にいいぞ。私が勝手にそう思っているだけだからな。」

「そんなことないですよ。俺も藍のこと師匠だと思っっていますよ。」

「ははっ、ありがとうございます透夜。」

ああ、それといい加減慣れてきただろ。慣れたら自然に敬語は取れるって言ってみたのだが、最初のほうは敬語取っていただろ。」

本当によく見ているな、確かにもう藍たちと話すのには慣れたけど・・・

「昨日会ってもう慣れるっていうのもおかしいかなって思っって後々つけたんですが、もういららないですか？」

「ああ、もう慣れたのならやめたほうがいいぞ。」

呼び捨てなのに敬語だと違和感もあったしな。」

やっぱりか。自分でそうしていたにも関わらず、感じていたからな。

「わかった。でも、修行の時は敬語を使わせてくれ。」

教えてもらっている身だしそこはしつかりしたい。」  
「わかった。」

こんな感じで話していると、とどまっているだけなのにバランスを崩した。

「すまない透夜、完全に忘れていた。急いで戻るぞ。」

そう言つて藍は俺の手をつかんで家に向かって飛んで行った。

—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*

「それじゃあお昼を作るか。」

家に帰つてきてから藍はそう言いながら台所へ行こうとしたが、俺はそれを引き留めた。

「俺も手伝つていいか？お昼作るの。」

簡単なことしかできないと思うが。」

本当は昨日から手伝いたかったが紫と話をしていたためできなかったからな。

「ああ、別に構わないぞ。むしろ有難いぐらいだ。」

そう言つて俺たちは台所に行った。

料理を作っている間は特に何事もなく終わった。

献立は焼きそばにわかめスープだ。

俺は具材を切るだけだったが。

出来上がった料理を食卓に運んでいるとき、明らかに寝起きの紫がいた。昨日の紫はどうした。

「おはよう透夜、藍」

「お、おはようございます？」

「おはようじゃありませんよ紫様。何時だと思つているんですか。」

た、確かにもうおはようっていう時間じゃない。すでに12時を回っている。

「も〜別にいいじゃない。」

それより今日のお昼は焼きそばね。透夜も一緒に作ったのかし



ら。」

「ええ、透夜と一緒に作りました。

でも紫様は朝ご飯が残っているんでそつちを先に食べてください。」

それを聞いた紫は寂しそうな顔をしていた。

「まったく、紫様がしつかり起きればいいんですよ。」

そう言っつて俺たち3人は食卓についた。

「それじゃあ」

「いただきます」

藍が作った焼きそばは美味しかった。

紫のために少し多めに作っつておいていたが結局食べられず、残つたのは俺のお腹の中におさまつた。

紫、悔しがつてたなあ

—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*

お昼を食べ終わつた後、1時間ぐらい妖力を回復させるための時間をもらい、ある程度回復した後再び庭に出ていた。

「透夜、調子はどうだ？」

「調子は大丈夫だけど妖力は半分も回復してないな。」

「よし、じゃあ午後は戦闘訓練でもするか。」

「戦闘？」

「ああ、弾幕ごつこを無視してくる奴らから守るためにな。

そんな、必要にならないかもしれないが。」

「わかつた。でもその前に、紫、そこで何してるんだ。」

俺が後ろに振り向きながら呼びかけるとスキマが開いて紫が出てきた。

藍は一瞬驚くがすぐにため息を吐いた。

「また見つかつちやつたわ。」

やっぱりその能力はすごいわね。」

それにもう慣れるなんてすごいわね。」

「そりゃどうも。で、何しに来たんだ。」

「ただ見に来ただけよ、透夜の実力がどれくらい何のかをね。」

藍、私は見ているから始めちゃっていいわよ。」

「はあ、わかりました。」

それじゃあ透夜、全力で私を倒しに来い。」

「

全力ですか？」

俺はそこに驚く。

「私なら大丈夫だぞ。お前より強いからな。」

だが一応ルールとして、飛ぶのは禁止、能力の使用は別に構わない。」

それとどちらかが戦闘不能になるまでやるぞ。いいな？」

まあ、確かにそうだな。俺が心配してもしょうがない。」

なんせ藍は九尾の妖怪だ。対して俺は一応人間だ。普通に考えて

藍が勝つだろう。」

「わかりました。それじゃあ行きますよ。」

そう言っただけは居合切りの体勢をとった。」

「ああ、いつでも来い！」

藍は体勢は変えずに俺を見ていた。

「それじゃあ、始め!!」

紫の合図で俺と藍の模擬戦が始まった。

## 6話 模擬戦と妖刀

「それじゃあ、始め!!」

透夜は紫の合図と同時に飛ぶ技術を応用させ、藍に向かって一気に踏み込み、居合切りをした。

「ハッ!!」

しかし、藍は危なげなくそれを後ろに大きく飛ぶことで躲し、お返しとばかりに妖力で作った無数の苦無を透夜に向かって一直線に飛ばしてきた。

流石に苦無と苦無の間隔が狭いため横に移動することで避ける。が、藍も透夜を近づけないためか苦無を放ち続けている。それでも少しずつ距離を縮めている。

あと少して刀が届く範囲に近づくと藍は苦無を飛ばすのをやめ、後ろに下がろうとする。

しかし、透夜はそれを許さず、さつきと同じ要領でさつきよりも半歩奥に踏み込み刀を横に振った。

藍はそれも避けるがさつきよりも結構ギリギリで避ける。

そのため、距離をとることができず透夜に反撃することもできずにいた。

「くっ、なかなかやるな透夜。」

藍は透夜が振るっている刀をギリギリで躲しているにもかかわらず笑みを浮かべながら言った。

「ありがとうございます。」

でもいいんですか?そんな余裕あるんですか?」

「そうだな、攻撃され続けるのも面白くないからそろそろ反撃させてもらおうか。」

そう言つて藍は透夜が縦に振った刀を人間が反応できない速度で躲し、そのまま蹴りを放った。

「がはっ」

俺は刀を振った直後で当然防ぐことができず、そのまま吹っ飛んでいった。藍はその隙を逃さず苦無を飛ばす。

しかしそれらは当たることがなかった。

何故なら、透夜の周りには黒い雷が発生しており、苦無をすべて消しとばしていた。

「なるほど、それがもう一つの能力か。」

「はい、これが俺のもう一つの能力、『雷電を操る程度の能力』です。『雷電を操る程度の能力』、文字通り電気や雷を操る能力。これが透夜が持つもう一つの能力だが、妖力を使っているため今はそんなに持たない。

透夜は自身の傷を確認した。

あそこまで派手にぶっ飛んだのにそんなに傷ついてはないな。流石に手加減してくれたか、体中痛いけど。

それに、妖力の使い過ぎか頭もクラクラするけど、まだいけるな。

そして透夜がまた居合切りの構えをとった瞬間に

「そこまで!!」

と、紫の声が響いた。

なんで？俺は紫のほうを見て、「まだやれる」と眼で訴えた。

「いいえ、これ以上妖力を使うと倒れるわよ。」

「確かに頭もクラクラしてるけど、妖力を使わなければまだ戦える。」

そう言っただけは紫に戦えることを伝える。

「ええ、確かに透夜の言う通りだと思うわ。それならまだ戦えるわね。

でも、もしこれが模擬戦でなく本当の命のやり取りだった場合、あなたはその状態で正常な判断ができるの？出来るんだったら続けても構わないわ。」

「・・・ッ」

そう言われ俺は言葉を失う。

確かにそうだ。あれだけ命のやり取りをしてきたのに、自身の判断ミスで死んでしまう場所にいたのに、そのことをこの模擬戦では忘れていた。あくまで模擬戦で戦うことは変わらないのに。

「透夜、今日はもう終わりにしよう。ゆっくり身体を休めるといい。」

「ああ、そうするよ、藍。その・・・ごめん、紫。」

「そこは『ありがとう』じゃない?」

「そうだな。ありがとう紫、藍。」

そう言つて俺は藍に言われた通り、身体を休めるために部屋へ、向かった。

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——

透夜が部屋に戻った後、紫と藍は彼について話していた。

「戦つてみてどうだった?」

「楽しかったですよ。なんせいろいろと驚きましたからね。」

「ふふ、それは見えてもわかつたわよ。」

「そうじゃなくて、強かつた?」

「ええ、強いと思いますよ。」

私が本気を出してないにせよ、あそこまで攻められるとは思いませんでしたよ。

彼、本当に刀を持ったのは初めてですか?」

「そうだ、本当に初めてなのか?」

「まあ、記憶にある限りでは数回振つた程度みたいだからほとんど素人同然みたいな感じで言つてたけど・・・。」

紫様も私と同じで疑問に思つたのだろう。

数回振つた程度であそこまで正確に相手を追い詰める動きができるのだろうか。

今回は私が相手だったから躲せたものの、人間だったらすぐに斬られるだろう。

「でも素人同然の彼にあそこまでできるのかしら?」

やはり紫様も思つていたらしい。

だが、いくら考えても答えなど出ない。当たり前だ、そんなこと本人じゃないとわからないからな。

「ですが、大丈夫そうですね。」

あれだけできるのなら簡単には死なないでしょう。」

「そうね。本気ではないにしても藍相手にあそこまで戦えたなら無茶しない限り死なないでしょう。」

・・・不安だ。

さっきのを見ると無茶しそうだ。

だが、一応な納得はしていそうだったからしばらくは大丈夫だろう。

「そういえば藍、透夜が敬語をとってくれたのよ。」

こんなにも早く慣れてくれるなんて思わなかったわ。」

そう言っただけで紫様は嬉しそうにしていた。

紫様の前では透夜は私に敬語を使っていたから自分が透夜が最初に敬語をとってくれたのだろうと思っただけだ。

私に対しては午前中にすでに敬語がなくなっていたので実際は私が最初なのは言わないほうがいいだろう。

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*

紫と藍が話しているころ、透夜は部屋で寝転がって考え事をしてた。

さっきの藍との模擬戦、なんか刀が自分の手足のような感じがしたなあ。刀なんてほとんど使ったことがないはずなのに。

実際、透夜はあの場所では数回しか刀を使っただけだ。

だけど懐かしさ？が刀を振っているときにすごい感じた。憶えてはないけど身体が憶えている感じ。

そんなことを考えていると急に頭痛が来た。

しかもそれは時間がたつにつれてどんどん強くなっていく。透夜は痛みに我慢出来ず、意識を手放した。

眼を開くと透夜は一面真っ白な空間にいた。

「なんだここの？」

そう言っただけで刃りを見渡すと、後ろに様々な花が描かれた着物を着た少女がこっちを見ている。少女の腰には見覚えのある刀が差してあった。

そう、その刀は昨日、紫からもらった月華だった。

それを見た透夜は若干怒気を放っていた。

「お前、誰だよ。なんでその刀を持ってんだよ。」

「あれ、名前を聞くときは自分から名乗るのが礼儀って教わらなかった？

でもいいよ。もう知ってるから。」

そう言っただけ少女は笑いながら自己紹介をした。

「私の名前は『月華』、あなたの持つ妖刀の魂。

だからなぜ持っているか？っていうのはそういうこと。

よろしくね、し、じやなっかつた、透夜。」

透夜は自分の名前を覚えてないのに呼んだことに驚くと同時に本当に月華なんだと理解する。

自分の名前は他にまだ紫と藍しか知らないはずだし、妖刀は生きてるみたいなのを紫が言っただけのを思い出す。

「あ、ああ、よろしく月華。」

ところでここはどこなんだ？」

「ここは透夜の刀の中の空間だよ。」

なかなか来ないからこっちから呼んじやつた♪」

「呼んじやつた♪ってあっちに行くのじゃダメだったのか？」

「うん。私がこうやって姿を現せるのは透夜の意識が現実から離れた時だけみたいなの。声も向こうには届けられないみたい。」

そうか、なら仕方がないな。

しかし声が届いたらサポートぐらいはしてもらおうと思ったけど無理ならしょうがないな。

「そっか、そういうええ俺の名前の前になんか言おうとしてたみたいだけど？」

俺は月華が言った「し」についてちよつと気になった。

「え、あつ、別に気にしないで。ちよつと間違えただけだから。」

「そうか。」

いや、流石に無理があるぞ。まあ、言いたくなさそうだから無理には聞かないが。

「ところで、月華は俺を殺すのか？」

俺は気になっていたことを聞いた。

紫が言うには殺さないらしいが本人(?)がいるならそつちに聞いたほうがいいだろう。

「ううん、殺しはしないよ、死んだあとは魂をもらうけど。」

むしろ力を与えるよ。」

そう聞いて俺は安心した。

死にたくはないが死んだ後なら別にどうなったっていいしな。それよりも

「力を与えるってなんだ？」

「私がまだ刀じゃなかったときに使えたものを少しだけ使えるようになるよ。こんな感じだね。」

そう言つて月華は刀を下に突き刺した。

すると、下からいくつもの茨が生え、透夜に絡みついた。

棘は体に刺さり、血を滴らせ、霊力と妖力を吸い取り、さらにきつく絡みつく。

「おい、何しやがる！」

そう言うと茨はきれいきっぱり無くなった。

「何つて私の力を見せたただけだよ。」

これぐらいが限界だけど透夜も使えるよ。私が今やったように地面に刺して、妖力が霊力を刀に流せばできるよ。」

「そうか、ありがとう。」

「ふふーん、もっと感謝するのだ。」

なんだか月華がすげー子供っぽく見える。

「ああ、ありがとな。これからもよろしく、月華。」

「うん、よろしくね透夜。」

それじゃあまたね。」

月華がそう言うと、だんだんと周りがぼやけ、俺は目を覚まし、外を見る。

「あれ、まだ結構明るい。それなりに向こうにいたはずなのに。」

そう言つて透夜は手に握っていた月華を見る。

意識を失つてからかなり時間がたっていた気がするが、考えたつて



仕方がないので次に月華に会ったときにも聞くことにした。  
「何はともあれ、よろしくな月華。」  
そう言っつて俺は月華を持ったまま庭に出た。

## 7話 晩御飯とその後

庭に出るとすでに藍と紫の姿は見えず、代わりに尻尾の二本ある茶色の猫がいた。

ん？あの尻尾どこかで見たような。

そんなことを考えながら猫がこっちに来るよう促してみる。

すると、人懐っこいのかすぐにごっちに来た。

しかし、あと少しで触れられる距離になったところで急に襲いかかってきた。

「うわっ」

透夜はしゃがんでいたため後ろに尻もちをついてしまった。

顔を上げ、正面を見ると猫がいるはずの場所には月華と同じぐらいの少女がこちらを睨んでいた。

「は？」

「なんで人間がこんなところにいるんです・・・あれ。」

驚いた俺は思わず間抜けな声を出してしまった。あれ？この少女どっかで見た気が・・・

向こうも何か気付いたような顔をしている。

「あつ、あの時紫を呼びに行った。」

「あつ、紫様がお連れした。」

お互い話してはないが一度、顔を合わせていることを思い出し、立ち話もなんだから縁側に腰を下ろし、話し始めた。

「初めまして、黒風透夜です。」

紫に助けてもらって今はここで面倒を見てもらっています。」

「藍様の式の橙です。気軽に橙と呼んでください。」

紫様のお客様と知らずに襲い掛かってごめんなさい。」

「いや、別に気にしないし、透夜でいいよ。」

藍の式ということはここに住んでいるのだろう。

自分の家に知らない人がいれば攻撃するだろう。あつちも憶えていなかったようだし。

あれ？でも昨日の夜いなかったよな、それに



そうして俺は料理ができたことを伝えに橙と紫を呼びに行った。後ろから誰かの視線を感じながら。

とりあえず俺は、橙と別れた庭に来ていた。

しかし、後ろから感じるもの以外特に何も感知しない。

「あれ、どこにいるんだ？」

仕方なく俺は消費霊力を増やし索敵範囲を広げた。

すると、庭から少し出た森の中に橙と思われる反応を感じ、急いで迎えに行った。

「橙、ご飯できたぞー。」

「わかりました。．．．それじゃあ行きましょう。」

「ああ。でもその前に、紫、いるんだろ。」

俺は後ろを振り返りながらそう言うのと、紫がスキマを開き、顔をのぞかせた。橙も驚いてる。

「ほんつと、なんでばれるのかしら？」

「ちなみに藍を手伝っているときから気付いてたぞ。」

「藍様の手伝いですか？」

「そうだよ。」

「なんか面白いことでも起きるかなと思って見てたけど、特に何もなかったわね。」

「そりゃあ残念でしたね。」

「ハア、それじゃあ先に行ってるわね。」

そう言つて紫は自分一人だけ行くこうとすると、引き留める。

「ちよつと待つて紫。」

「なあに。」

「なんでここで呼んだかわかるよなあ。」

俺たちもスキマで連れて行ってくれよ。」

スキマを通るのはあまり好きではないが、霊力を鍛えるチャンスだからな。

「はあ、いいわよ。透夜も鍛えられるし。」

「おお、ありがと．．．」

俺が紫に感謝を伝えようとするのと急に浮遊感に襲われ、ズシン！

「うわー！」

俺は居間に落ちた。

「イタタ」

「大丈夫か、透夜？」

どうやら藍を驚かせてしまったらしい。

あのやろーと思いながら落とした犯人がいるほうを見る。すると、すぐにスキマが開き、紫が橙を抱えて出てくる。

「大丈夫く透夜。」

「大丈夫ですか、透夜さん。」

橙は心配そうにしているが、紫は面白がっている。

「紫、取り合ずお前は後で切り刻んでやる。」

そう言っただけ俺は紫を睨むが相変わらず面白がっている。

「それはそれは、楽しみにしていますわ。」

それより早く食べましょう。」

「ああ、そうだな。せっかくのご飯が冷めてしまうからな。」

「はあ、後で憶えとけよ。」

「それじゃあ皆さん一緒に」

「いただきます」

そうして、いろいろとゴタゴタしたが、俺たちは食べ始めた。

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————

夜ご飯を食べ終え、俺は昨日と同じように庭で刀を振っていた。

一応藍に皿洗いを手伝うか聞いたところ、狭いからということでは断られてしまい、紫は食べ終わって早々、スキマで逃げた。

そんな感じでやることがない俺は風呂まで刀を振っているというわけだ。

それにしても、あまり使ったことがないはずなのに何故こんなに身体が憶えているのだろう。もしかしたらあそこに来る前では刀を

使っていたのかもしれない。

・・・いやいや、流石にないだろう。見た感じ15歳ぐらいの奴が過去に刀を使っているなんて。それにあそこに来る前だから何歳の時だよ。

「そういや、こんなことを考えながら刀を振っているけどこんなんで大丈夫なのか。」

刀を振りながら自問自答していると紫の気配が伝わってきた。

「はあ、毎度何の用だ、紫。」

すると、いつも道理、スキマから紫が出てくる。

「お風呂焚けたから呼びに来たのよ。」

「わかった、ありがとう。」

そう言つて俺は月華を地面に突き刺し、少し妖力を送る。

「ところで紫、さっきの忘れてないよなあ。」

そうして俺は月華に妖力を流し込む。

紫はスキマに逃げようとするがもう遅い。

紫の周りから生えてきていた茨は瞬く間に紫を捕らえる。

「きゃっ、何よこれ。イタツ。」

自力で抜け出そうとするが徐々に茨が肌に食い込んでいく。

今回は妖力は吸収していない。ちよつとした罰みたいなものだしな。

「そろそろ懲りたか？」

「ええ、もう懲りたから早くこれを解いてくれない？」

そうして俺は妖力を流すのを止めた。すると、紫に絡みついていた茨が消えていった。

「便利だな、これ。」

「それよりも、いつこんな能力を手に入れたのよ？」

俺は紫に事の経緯を話した。

「ふーん、なるほどね。」

放し終わると紫は面白そうに刀を見ていた。

「よかったわね。手札が増えて。」

あつ、そうそう、近々神社で宴会があるみたいだからそこに出席し

てきなさい。もう話は通してあるから。」

「宴会？」

「そ、宴会。大丈夫よ、私も一応出るから。」

なら大丈夫そうだ。実際俺はまだここから出たことがないし、神社って言われてもどこにあるのかわからなかった。

だけど紫がいるなら大丈夫そうだ。

「わかった。」

「なら向こうにも伝えておくわね。」

「ありがとう、紫。」

「別にいいわ。」

それよりも早くお風呂に入ってきちやいなさい。」

「あああああ！」

忘れてた。

すでに紫と話し始めてから結構時間がたっている。

なんか、俺が入った後に紫、そして藍が入るようなのだ。

紫は知らんが藍は毛で湯が汚れることから最後に入るらしい。

そのため、入ってる時間が長いと藍が怒るみたいなのだ、早く入りたいから。

そうして俺は急いで風呂に入ったのだった。

そして、出た後に藍にちよつと怒られたのだった。

## 8話 スペルカード

「今日は弾幕の作り方と『スペルカード』について教えるぞ。」

透夜と藍は今、庭で修行を始めようとしていた。

「弾幕は昨日も見せているから説明はいらないな。」

「はい」

「それじゃあ『スペルカード』について説明しよう。」

スペルカードは簡単に言えば弾幕ごっこで使う必殺技みたいなものだ。」

なるほど、必殺技か。かっこいいな。

だけど

「藍さん、弾幕ごっこが何かは聞きましたが、どんなルールなのかは聞いてないです。」

藍はたまにおちよちよいだなあ。

「そうだったか？まあ基本的に『弾幕に当たる』、『地面に落ちる』、『最後のスペルカードを突破される』、この三つが負けになる。」

別に武器は使ってもいいぞ。」

ほう、ということは月華は使えても能力は使えないな。

「わかりました。」

「それじゃあスペルカードについてだが、さつきも言った通り弾幕の必殺技みたいなものだ。もちろん当たれば勝負は負けになる。」

だが基本パターンは変わらないから覚えれば大丈夫だろう。」

そう言つて藍は三枚の紙を取り出し、透夜に渡す。

「その紙にどんなスペルにするか思い描きながら霊力か妖力を注いでみる。想像したスペルに必要な分注いだら文字が出てくる。そうしたら完成だ。」

うーん、どんなのにしよう。やっぱり自分の能力に合ったものだな、月華のは使えないし。と、なると電撃系統化か。確実に相手に勝てるもの。

そんな感じでスペルについて考えていると

「あと逃げ場がないものは禁止だ。それだと勝負にならないからな。」



まあ、中には本当に逃げ場があるのかと疑うものもあるが。」

そりゃあそうだな。そんなの、勝った方も負けた方も面白くない。藍が言ってたようにあくまで遊びのようなものだからな。

それを踏まえて再び考え始める。

空間把握なんて弾幕としては使えないからなあ。やっぱり電撃しかないか。

そうこう考えているうちにかかなりの時間が過ぎていく。

藍は待っていてくれていたがこれ以上時間はかけたくない。

とりあえず思いついたものだけ作ってみるか。

そして透夜は持っている紙の一枚に妖力を注ぐ。

するとあまり注がないうちに文字が浮かび上がる。

「お、やっと一枚できたようだな。」

「はい、時間かかってしまいました。」

「いや、別に気にしないぞ。」

「はい、いいものにしようとすればするほど時間はかかるものさ。」

「はい」

そうして、透夜はまた作業に戻った。

\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*

「出来たあ。」

「終わったようだな。」

「はい」

こうして透夜は三枚のスペルカードを作り終えた。

時間がかかったのは最初の一枚だけで後の二枚はそこまで時間はかからなかった。

「それじゃあ次は弾幕の作り方というより弾のだが、あとどれくらいのこっている？」

「妖力は余裕がそんなにないですが、霊力のほうは全然大丈夫です。」

空間把握なんて攻撃には全く使えないためどうしても妖力の消費が激しくなってしまう。実際スペルを作るのもすべて妖力を使って

いる。

「そうか、それじゃあ作り方だけ教えよう。」

と、言っても妖力を身体から出し、それを様々な形にするだけだ。昨日見てたからなんとなくわかるだろう。

「霊力も同じ方法で出来るからな。ちよつとやってみな。」

うーん、大体能力を使う感じでいいのか？で、それを球体にする感じか？

透夜はいつも放電する感覚で霊力を出し、弾を作ろうとするが、うまくいかない。

「あれ？」

「あの時、私がお前を浮かせたのを憶えているか？あれは妖力をお前の体に纏わせて浮かせていたんだ。ひとまずあの石を浮かせてみる。」

そう言つて藍は庭に落ちている小さい石を指さした。

「はい」

それを透夜はすんなりと浮かせる。

「そう、それを纏わせるんじゃないかと球、ボールにしてとばすんだ。」なるほど、そうやって作るのか。

「ごうか。」

そう言つて透夜はこぶしぐらいの大きさの球を作った。

「そしたらそれをスムーズに、撃つては作り、撃つては作るを繰り返して弾幕の完成だ。」

とりあえずここまですてお昼にしよう。」

そうして透夜と藍は休憩のため家に戻るのであった。

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*

昼食をとり、少し休憩した透夜と藍は家の中にいた橙を加え、再び庭に出ていた。

「藍様、これから何をしますか？」

「透夜とちよつと弾幕ごっこをしてみたらどう思つてな。」

透夜は覚えたてだが飲み込むのが速いから丁度いい相手だと思つてな。出来るか、橙。」

「わかりました。」

「透夜もいいな。」

「教えてもらつてる身なので異論はありません。」

「よし、それじゃあスペカの使用は三回、使うときは必ず宣言すること。すべて突破された時点で負けだ。それと弾幕に当たると地面に落ちても負けだ。いいな。」

「はい」

「それじゃあ二人とも離れて」

透夜と橙はお互い十分な距離をとる。

「橙、透夜が初めての弾幕ごっこだからといって油断すると痛い目を見るぞ。」

「大丈夫ですよ、藍様。直ぐに終わらせますから。」

「はあ、ホントにわかっているのかなあ。」

まあいい。それじゃあ始め!!」

そうして、透夜の人生初の弾幕ごっここの火蓋は切られた。

透夜はとりあえず後ろに下がりながら薄いが弾幕を放った。しかし、橙はお返しとばかりに弾幕を放ちながら躲す。

透夜は撃つのをいったんやめ、躲すことに専念する。

くっ、やっぱりあつちは慣れてるからこっちは躲すのに精いっぱいだな。

「逃げてばかりだと勝てませんよ。」

橙は挑発するかのようになら言った。

くっそ、言い返せねえ。とりあえず反撃しねえと。

「攻撃しないのならこっちから行きますよ。」

そうやってスペルカード宣言をする。

「式符『飛翔清明』!」

スペルカードを使った橙は星を描くように動きまわり、四方八方に弾幕をまき散らしていく。

透夜はそれをギリギリで躲すが、星を描き終わったときに弾幕が急に弾道を変える。

弾幕の予想しない動きに透夜は驚くが、透夜もスペカを使い迎え撃つ。

「雷電『雷光蟲』」

すると、透夜の周りから雷を纏った無数の小さい球が不規則に飛んでいき、いくつかの弾を相殺し、残りはすんなりと躲した。

もともとこのスペカは弾幕ごっこじゃない時では、当たると動きを封じることができ、そのため威力は少々低いのだ。弾幕ごっここの時は当たると負けなのでそこまで意味はないが。

「それならこれでどうだ！」

天符『天仙鳴動』！』

今度は走り回りながら弾幕をばらまく。

透夜はさっきのスペカ同様、何か変化があるだろうと予想していた。

すると案の定、橙が走るのをやめると同時に、こぶしぐらいの大きさだった球が小さくなり速くなった。

今回は驚くこともなく余裕を持って対処した。

「雷域『スパークフィールド』！』」

このスペカは逃げる時や藍と模擬戦をしたときに使ったものを少し変えたもので、攻撃に反応し、止めるのは変わらないが、攻撃されたところから雷撃を放つようにしたものである。弾幕ごっこ用に作ったため威力は低いが『雷光蟲』と同じように、実戦でも使えるものである。

実際今も、橙の弾幕を消しながら雷撃を放っている。

「くっ、やりますね。でも、これで最後ですよ。」

鬼符『青鬼赤鬼』！』

「こっちもこれで最後だ！」

くらえ！雷電『黒雷砲』！』

橙からは左右に赤と青の大きめの球が現れ、その後ろから無数の弾幕がばらまかれる。

一方、透夜のラストスペルはいたってシンプルで、名前通りのただの黒い雷による砲撃である。

だが他のスペカと違って威力は段違いである。

実際『青鬼赤鬼』と一瞬拮抗するがすぐに飲み込み橙に迫る。

「え……うわあああああああ」

そして橙をも飲み込んだ。

弾幕ごっこを終えた透夜と橙は地上に降りていた。

透夜のラストスペルを受けた橙は妖力で多少は防げたが、服のあちこちが炭化してしまっていた。

「その、ごめんな。」

いくら勝負だったとしても力技でゴリ押ししてしまったことに多少の罪悪感が沸いた。

「いえ、別に気にしないですよ。」

「そうだ、気にすることはないぞ。」

そう言いながら藍が来た。

「スペルカードにもいろいろなものがある。美しいものから力技なものまで。」

『青鬼赤鬼』もどちらかというと力技寄りだ。

だから気にすることはないぞ。」

「そうですか。」

「はい、ちよつと悔しいだけですから。」

それよりお腹すきました。」

そう言っ橙は自身のお腹をさすった。

日も沈んできている。

「橙もそう言っているし、帰ってご飯にするか。透夜、疲れているだろうが手伝ってくれ。」

「言われなくても手伝うよ。」

「美味しいの待ってます。」

そうして俺と藍は台所に向かった。

その時、橙が俺の服を引っ張た。

「今日はありがとうございました。」

「また一緒に遊んでください。今度は負けないですよ、透夜さん。」

「ああ、こちらこそありがとうございます。」

「またよろしくお願いな。」

「そうして橙はご飯ができるまでの時間つぶしのためにどこかへ駆けって行った。」

「俺は「元気だなあ」なんて思いながら急いで台所へ移動した。」

## 9話 挨拶

ここはどこだ。なんで燃えているんだ？

透夜は今、あちこちで燃え続ける町の中にいた。

空は暗雲に覆われており、雷が発生している。

町の中には人ひとり見当たらない。こんだけ燃えていれば人は逃げ惑うだろう。死者も少なくないはずだ。

それなのに人がいない。死体すらない。

とりあえず移動しよう。

そう思っつて移動しようとしたとき一つの咆哮が響いた。

聞こえた方に振り返るとかなり周囲の建物より大きい影があった。

今まで自分の目の高さまでしか見ていなかった透夜はその存在に気が付かなかつたのだ。

透夜はただ恐怖した。

燃え上がる炎は黒い鱗を映し出し、爬虫類を思わせる眼を光らせ、黒き翼を照らした。

これだけ見た目がわかると嫌でもわかる。わかってしまう。

あれは竜だ。ありとあらゆるものに破滅をもたらすものだ。

それくらいは透夜も憶えていた。消された記憶は思い出などの大切なもの、生きるために必要なことは憶えている。

あんなものに人間は勝てるのか。勝てる生物などいるのか。

そんなことを考えていると竜がこつちを向き、透夜と目が合う。

その瞬間、ただただ恐怖した。全身が振るえる。逃げようにも足が動かない。動こうとしない。

そうこうしているうちに、透夜に気づいた竜の口に雷が溜まっつき、透夜に向かって撃ちだされた。

—————

透夜は勢いよく布団から飛び起きる。

「はあはあ・・・夢か。」

かなりの汗をかいていたようで体はべたつくし、かなり不快だ。布団もかなり濡れている。

こんな状態で寝ようとも思わないため透夜は月華を片手に外に出た。

透夜は月華を振りながら考える。

何だったんだあの夢は。あんな場所は知らないし竜なんて見たこともない。

だけど、知らないにしてはかなり現実感があつた。

「あら、何してるの透夜。」

「・・・紫か。」

能力を発動しているはずなのに話しかけられるまで気が付かなかった。

「いつからいたんだ？」

「今さっきよ。あなたが素振りしているのが見えてね。」

それで、どうしたのよ。こんな時間に。」

「いや、ちよつと眠れなくて。」

「それじゃあ、私にちよつと付き合いなさい。」

そう言つて紫はスキマから一本の酒瓶を取り出し、縁側に座つた。

別に飲む気はなかったが透夜も隣に座る。

すると、紫は一杯勧めてきた。

「別に俺はいいです。」

「あら、遠慮なんてしなくていいのよ。」

「そういうことじゃなくて・・・」

「別にあなたぐらいの娘も飲んでいるから平気よ。」

そう言つて俺に勧め続ける。

「それじゃあ一杯だけ。」

そして俺は紫からお酒の入ったコップを受け取り、一口飲んでみる。

「・・・おいしい。」

「それはよかった。」

実際、初めてだから、このお酒がどのくらい美味しいのかはわから



ない。だけどかなり美味しく感じられた。なんだか気持ちも落ち着いてくる。

「落ち着いてきたようね。」

「えっ」

「なんか心が不安定なように見えたから。」

「そのためにわざわざ?」

「大量のお酒は体にも心にも毒だけれども少量なら薬にもなるわ。」

もう大丈夫そうだから今日はもう寝なさい。」

「ありがとう、紫。」

「おやすみ。」

「ああ、おやすみ。」

そうして俺は部屋に戻り、再び寝床についた。

今回はとても穏やかに眠りにつくことができた。

—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*

朝、目を覚まし、朝食を食べていると、紫が起きてきた。

「珍しいですね。紫様が朝に起きてくるなんて。」

「何を言ってるの、藍。私だってたまにはしっかり起きるわよ。」

それより、透夜。昨日はしっかり眠れた?」

「ああ、昨日というより今日だけど大丈夫だよ。ありがとな。」

「それならよかった。」

「なんの話ですか?」

藍は何の話か分からないように首を傾げる。

「藍は別に知らなくても問題ないわ。」

「そうですか。」

「あ、あと今日は午後の修行はやらなくていいわ。」

「なぜですか?」

「透夜を霊夢のところ連れて行こうと思って。」

「なるほど、わかりました。」

「紫、霊夢って誰だ?」



お互い自己紹介を済ませる。

「それで、なんで宴会前に連れてきたのよ。」

「知っている人が一人でもいたほうがいいじゃない。」

そう言つて、紫はスキマを開いた。

「それじゃあまた宴会の時に会いましょう。」

透夜はしつかり霊夢の手伝いをするのよ。」

「へ・・・ちよつと待てええええ。」

俺は呼び止めようとするが、スキマを閉じ、帰ってしまった。

「はあ、霊夢、俺は何を手伝えばいい?」

「立ち直り早いわね、あんた。」

「しようがないだろ。おいてかれたらどうしようもないからな。紫

め、後で憶えてろよ。」

「それもそうね。それじゃあ外の掃除をお願い。」

「りよ〜かい」

俺は霊夢に頼まれたため外に出て掃除を始めた。

その時、猛スピードで空を飛んでいる何かがこっちに向かって突っ込んでくるのを感じた。

「わあああああどいてくれえええええ」

俺はそれをギリギリで避ける。

すると、飛んできたものは止まることなく地面に突っ込んだ。

心配して近寄ってみると、黒い三角帽子を被った少女が地面に突き刺さったホウキを抜こうとしていた。

「だ、大丈夫か?」

「わりい、ホウキを抜くの手伝つてくれないか?」

「お、おう」

「いや〜助かった。ありがとな。そういやあお前、初めて見る顔だな。

私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだ。魔理沙でいいぜ。」

「俺は黒風透夜だ。俺も透夜でいい。」

「よろしくな、透夜。」

「こちらこそよろしく、魔理沙。」

そう言ってお互い握手をしようとしたところでドアが勢いよく開かれ、若干怒ってる霊夢が来た。

「なんか大きい音が聞こえたと思って見てみれば、またあんただったのね、魔理沙。」

怒ってる霊夢を見て透夜と魔理沙は一步後ずさる。

「いや、霊夢、これには深いわけが・・・」

「問答無用!!」

そうして俺と魔理沙は二人で頭にたんこぶを作る羽目になった。なんで俺まで・・・

「そういえばあんたたち、いつ仲良くなったのよ。」

「今さっきだよなあ(だぜ)。」

「ふーん、まあいいわ。それより二人とも、掃除よろしく。」

霊夢が戻っていくまで真面目に掃除をしていた魔理沙は戻ったとたん話し始めた。

「いいか透夜、今ので分かったと思うが霊夢は怒らせたらダメだぜ。問答無用で武力行使してくるからな。」

怖いな、巫女さん。『素敵な巫女』って紫から聞いてたけど素敵じゃないじゃん。

「特にお金と食べ物には要注意だな。あいつ、賽銭箱を見るのと食べる時が幸せを感じる時だからな。」

「そ、そうか」

「前に霊夢の楽しみにしてた煎餅を勝手に食っちゃった時はヤバかった。スペカまで使ってきたしな。」

「それは魔理沙が悪いんじゃない。」

誰でも楽しみをとられたら怒るだろう。

「まあ、確かに許可なく食べちゃった私がわるいけどさあ・・・煎餅一枚でスペカは酷くないか?」

「今仲いいんだったら別にいいんじゃない?」

霊夢ももう許してるんだろ、友達を失うんだったらスペカ撃たれるほうがマシだろ?」

魔理沙は驚いている。まさかそんな答えが返ってくるとは思って

なかつたようだ。

「そうだな。よかつたぜ。霊夢が友達のまままでいてくれて。」

そうして、話しに夢中になっていて止まっていた掃除を再開しようとしたとき、ドアが開かれた。

もうわかつただろ？

霊夢が戻ってからすぐに話し始めたためあまり進んでいない掃除、箒で掃く手が止まっている俺と魔理沙、そしてそれを目にした霊夢。

そう、俺達には『鉄☆拳☆制☆裁』が待っていた。

## 10話 宴会

魔理沙と一緒に神社の敷地内の掃除を終え、他の宴会参加者が来るまで三人で雑談していた。

「そういえば透夜はどうして幻想郷に来たんだ？」

「簡単に言うと、逃げてた時に紫が拾ってくれた。」

「え！紫がか？幻想郷のためなら誰だって殺すあいつが？」

魔理沙はかなり驚いているようだけど、こっちも相当驚く。

「そうなのか？でも紫、俺に対して優しく」でもそれが幻想郷の中の紫の評価。・・・えっ」

「幻想郷の住民が紫に対して抱いてる姿。

だからあいつは滅多に人前には出てこないし助けることもない。あんたを助けたのもあの胡散臭いスキマ妖怪のことだから何か企んでいるか、ただの気まぐれかってところね。」

だから紫は「お願いを聞いて」なんて言っていたのか。

まあ無理のない範囲ならしつかりとこなすつもりだけど。

「それでも紫は何かを利用してしようとしても、ただの気まぐれでも、俺を助けてくれた。命を救ってくれた。

だから俺にできる範囲で恩返しをする。」

「そう、それじゃあいつか敵になるかもってところね。」

紫はやらない気がするが、もし異変を起こすのならばその時は手を貸そうぐらいには考えてる。

「そうかもな。

ただ、敵になるかは本人に聞いてくれ。」

そうやって後ろを振り返る。

するとスキマが開き、紫が出てくる。

「別に起こす気はないわよ。

だけど、幻想郷のことをこんなに思っているのにあの評価は酷いと思うわ。」

いきなり紫が出てきて魔理沙は驚いているが、霊夢はやっぱり来たかって感じの顔をしている。

「事実でしょう。その評価を消したかったらその胡散臭い顔をやめることね。」

「ふふ、そうね。」

それより、透夜はしつかり手伝ってたかしら？」

「ええ、魔理沙の相手をしていてくれたから助かったわ。」

霊夢は笑みを浮かべながら皮肉を混ぜてそう言った。

それを聞いた魔理沙は机を叩きながら霊夢に聞く。

「おいおい、それじゃあ私はいつも邪魔っていうのかよ。」

「まったく、ゆつくりしたい時に来るんだから邪魔ったらありやあしないわよ。」

「なんだと、この野郎。」

若干喧嘩しているように見えるが、霊夢はただからかっただけのよ  
うで、魔理沙もそれがわかつているようだ。だから二人とも笑つてい  
る。そんな関係が羨ましく感じる。

「大丈夫よ。あなたもきつと仲良くなれるわ、透夜。」

「いや、別にそんなんじゃない。」

その答えに紫は微笑む。

まったく、すぐ人の考えていることを読まないでほしい。

そんなこんなで一人目？の参加者、魔理沙と紫を含めると三人目が  
到着した。

「お邪魔しまーす、霊夢さん。」

あやや、魔理沙さんはともかく紫さんが来ているのは珍しいです  
ね。それにその人は誰ですか？」

そう言つて背中に黒い翼を持つ少女が入ってくる。

「初めまして、黒風透夜と言います。よろしく願います。」

「初めまして、透夜さん。私は『射命丸 文』と言います。こちらこそ  
願います。」

ところで、透夜さんは人間ですか？妖怪ですか？」

「人間ですよ。」

「そうですか。いやあなんか妖力も霊力も感じられたのでちよつと気  
になったんですよ。」

あつ、私には敬語じゃなくて結構ですよ。私は職業柄、敬語を使っています。」

「職業柄？」

「はい。私、こう見えても新聞記者なんです。」

お近づきの印にどうぞ。『文々。新聞』です。」

「あ、ありがとうございます。」

そうして、文々。新聞を受け取ると二人の少女が来た。

「来たわよ霊夢。」

「お邪魔します。」

一人は小学生ぐらいの身長で背中に羽が生えてる。もう一人は霊夢より少し高くくらいでメイド服を着ている。

「うん？鴉とスキマ妖怪も来ていたの。それに一人、見慣れない奴がいるわ。」

「私は鴉じゃなくて鴉天狗ですよ。」

「あら、うるさいところは一緒じゃない。」

「そんなことはどうでもいいわよ。それより」

そう言つてやたら大人びた幼女はとつちを向くなり強大な妖力を浴びせてくる。

それに対して俺は内心びくびくしながら平静を装っていた。

「なかなか肝が据わっているわね。」

あなた、名前はなんていうの？」

「え、あ、く、黒風透夜です。」

「そう。私は紅魔館の主、『レミリア・スカーレット』よ。」

「同じく紅魔館のメイド長の『十六夜 咲夜』です。」

レミリアは自己紹介が終わると妖力を出すのを止める。

「あなた、私のところへ来ない？」

どうやら試されていたらしい。それにしても勧誘するの早くないか？

「残念だけど吸血鬼のお嬢ちゃん、透夜はうちの子だからあなたのことにはやらないわよ。」

それを聞いたレミリアは明らかに悔しがっている。



ありがとう、紫。俺じゃ断れる気がしない！

「チツ、八雲の息がかかっていたか。」

まあいい、いつでもうちに来るといいわ。あなたならいつでも歓迎するわ。」

「ええ、うちの門番にも言っておきますのでいつでも来てください。」

「わかりました。ありがとうございます。」

「それじゃあ、また後で飲もう。」

そう言っレミリアたちは霊夢たちのほうへと話に行った。

その後、萃香がやってきた。

「あはは、そうか。お前、紫の奴に拾われたのか。そりゃあ大変だな。それよりもっと飲め飲め〜♪」

「い、いや、俺、そんなに飲めないんで。」

「そうなのかあ？酒はうまいぞ、酒は。」

「は、はあ」

酔っ払いとその相手をさせられている人みたいな感じになっていった。

「ちよおつとく、透夜あくこつちに来なさいよお〜」

呼ばれたほうを向くと、見事に出来上がった霊夢がいた。

「何？霊夢」

「ちよおつとく気になったんだけど、あんたどうやって幻想郷にきたのよお〜」

「いや、それはさつき言っただろう。」

「そ〜じゃなくてえ〜どうして逃げてたんだってこと。」

「お、私も気になるぜ。」

「あやや、それは私も気になりますね。」

「うん？お〜天狗か。よし、一緒にこつちで飲め。」

「あや？萃香様？いや、ちよつ、助けて〜霊夢さ〜ん、魔理沙さ〜ん、透夜さ〜ん。」

話しに食いついてやってきた文だったが、萃香に見つかってしまい速攻で連れ去られていった。

「文の奴はほつといて、どうして逃げていたんだ？」

うーん、あんまり話したくはないけど、もう関係ない話だしいつか。「そうだなあ。まず初めに言おうと、俺は過去の何年か前から先の記憶がないんだ。」

「えっ」

「だから、憶えている最初の記憶は手足を鎖で繋がれ、どこかに連れていかれるところなんだけど・・・」

透夜は自分がここに来た経緯を話そうとするが、明らかに最初の記憶喪失の部分で雰囲気が暗くなる。

「やめるか。こんなところで話すことでもないし。」

「その方が賢明よ、透夜。」

霊夢たちも誰でも触れてほしくない話はあるものよ。気をつけなさい。」

「お、おう。わかったぜ。」

「悪いわね。少し酔っていたわ。」

「いや、別に俺はいいんだが。」

こんな感じで歯切れ悪くこの話は終わりになった。

その後は皆で飲んだり食べたりでまるでお祭りのような夜だった。

## 11話 依頼

「うーん、あれ、いつの間に寝ちやっってたか。」

昨晚、博麗神社で宴会をし、お酒を飲みそのまま寝てしまったようだ。ほとんどのメンバーが寝てる。

「あー、酒くさ。若干頭痛いし飲み過ぎはダメだな。」

「うートイレトイレ。」

「そうして透夜はトイレに向かった。」

「トイレで用を足した後、なんとなく外の空気を吸いに行く。」

すると、縁側で紫とレミリアが話をしていた。

「紫は近づいてきた透夜に気づき、呼び止める。」

「あら、どうしたの？」

「いや、ちよつと外の空気を吸いたくなって。」

二人は何してるんだ？紫はともかくレミリアは寝たほうがいいんじゃないか？」

「失礼ね。私は誇り高き吸血鬼よ。こつちが本来の活動時間よ。」

「そうだった。すっかり忘れてた。」

「それはごめん。そうだったな。」

「わかればいいのよ。」

「それで何してたんだ？」

「あなたのことを話していたのよ。」

「俺のこと？」

「そうよ。あなたの記憶とお嬢ちゃんが見たあなたの運命について。」

「紫が目を伏せながら言う。」

「なんか嫌な予感がする。」

「運命ってわかるのかよ。」

「ええ、私の『運命を操る程度の能力』でね。」

「マジかよ。そんな力ほとんど反則級じゃん。」

「まあ操るって言っても自分に対して可能な限りだけだけど、他のヒトの運命を見たりもできるわ。」

「うわあ。レミリアはこれくらいしかできないみたいって言ってるけ」

ど十分すぎるだろ。

「で、あなたの運命だけど、知りたい?」

レミリアの問いに数秒考える。

「うーん、知りたいけど別にいいです。」

「そう。何故?」

「運命って言うのと未来じゃないですか。それなら何があるか知らないほうが楽しいと思うんですよ。」

少なくとも幻想郷なら。」

俺は笑いながらそう言った。気にはなるが何が起こるかわからないほうがきつと楽しいだろう。

「そう、わかったわ。だけどこれだけは言っておくわ。」

自分の心を強く持ちなさい。それだけよ。」

「あ、はい。わかりました。」

俺は首を傾げながら返した。

レミリアの言ったことについていまいちわからなかったが忘れないうようにしよう。

紫はレミリアから聞いたようにで相変わらず目を伏せているがその顔はどこか悲しげに感じられた。

「その、記憶のほうは何を?」

俺は運命のことから話題を変えた。

もう気になることはないし、何しろ紫の悲しげな顔は見たくなかった。

「そっちはね、もしかしたら思い出せるかもしれないわよって話。」

あなたはどうかなの? 記憶を思い出したいかしら?」

「戻るのか? 記憶。」

「あくまで可能性よ。もしかしたら知り合いの魔女が治せるかもしれないから。」

「戻るんだったら知りたい!」

「なら話をつけておくわ。暇なときに紅魔館に来なさい。」

「ああ、わかった。」

「そんなに目を輝かせないで。あくまで可能性の話よ。」

「ふふ、嬉しいのよ、可能性でも。少なくとも気にはなっていたようだから。」

ようやく紫が笑った。

「そんなに嬉しそうか？」

「ええ、そこまで目を輝かせていたらね。」

そう言つてレミリアは呆れていた。

「それじゃあ私たちは行くわ。咲夜、帰るわよ。」

「はい、お嬢様。」

すると、そこまで誰もいなかったはずの場所に急に咲夜が現れる。空間を弄つたのか一瞬頭が痛くなる。

「それじゃあね。」

そう言つて飛んでいくのかと思いきや紫に耳打ちする。

二人とも一瞬、険しい顔になるがすぐに普段と同じ顔になる。

「それじゃあね透夜、またね。」

「それではまた。」

二人は未だ暗い空に飛んでいきすぐに見えなくなった。

レミリアたちを見送つた後、少し紫と話をした。

「なあ紫。俺はここにいていいのか？」

「なぜそう思うの？」

いつも考えていることを見透かしているくせに、まったく今回も見透かしてほしいよ。

俺は空を見上げながら思っていることを口に出した。

「さっきの紫の表情からして俺がなんかするんだらう？」

だから俺はここにいていいのだからってね。」

「別にいいわよ。あなたがいたいと思うならいて。幻想郷はすべてを受け入れてしまうから、そう残酷なものね。」

確かに私はあなたの運命を聞いたわ。だけどそれは数あるうちの一つでしかないわ。確定の運命ではないの。ならば他の道を切り開けばいい、あなた自身の手で。」

「そうだな。ありがとう紫。」

「いいえ、これくらいどうってことないわ。」

話し終えたころにはすでに日が昇り始めていた。

「それじゃあ私たちも帰りましようか。」

「いいけど霊夢たちに挨拶していかなくていいのかわ？」

「大丈夫よ解散はいつもこんな感じだから。」

そう言つて紫はスキマを開き中へ入る。

「なあ紫」

「なに、透夜」

「紫はレミリアと仲悪いのかわ？」

それを聞いた紫は軽く微笑んだ。

「ええ、とつても。」

だからあの子の下にはつかないで頂戴。」

「返しきれない恩を返すまでは紫のもとにいるし返しきつたとしても下につく気はないよ。」

「そう、なら良かった。」

だけど恩人だつていうならもう少し優しくしてくれてもいいんじゃない。初めて会つたときはあんなに優しくそうだったのに。」

「ハイハイ。残念だけどこつちが本当の俺だ。だけど、その、なんていうか、勝手だけど家族みたいだなつて思っているからな。／＼／＼」

それを聞いた紫は少し驚いていたがすぐに笑つた。

「ふふ、いいのよ、恥ずかしがらなくて。姓は違うけど私も藍も橙もあなたを家族だと思つているから。」

だから困つたときは私たちを頼りなさい。」

「!!あ、ありがとう。」

俺はその言葉に嬉しくなり一滴の涙をこぼした。

「だから別にずっと家にいたつてかまわないのよ。」

「流石に独り立ちぐらいさせてくれよ。」

「そう言うと思つてもう家は手配してあるわ。」

完成までに時間はかかるけどね。」

マジか紫。仕事が速いな。

「時間がかかるつて今作っているのかわ？」

「いいえ、まだよ。だつてさつき萃香にお願いしたんだもん。」

「というかもう大丈夫なのか？」

「ええ、橙に勝てたのだから大丈夫よ。そうそう負けることはないわ。それとあなたの家は『人里』っていう場所に建てるのだけれどもそこで最初のお願いがあつたの。」

あの時は紫のお願いは聞くつて言つたけど俺ができることは紫もできるんじゃないか？

「なんだ？」

「人里にいる時だけでいいからそこにいる人間と妖怪の監視をお願いしたいの。特に何か報告もいらぬ。あなたが必要だつて思つたことだけ報告してくれればいいわ。」

「一応理由を」

「幻想郷は妖怪と人間の均衡によつて保たれているわ。」

だけどそれが崩れれば幻想郷は崩壊してしまう。だから人間でよからぬ考えを持つてゐる人間がいれば報告してほしいのよ。」

「別にいいけど、妖怪側は？」

「妖怪のほうは私と藍でやつてゐるわ。人間側も私がやつていたんだけどねうまく干渉できないから透夜にお願いしようと思つて。」

「殺したりはないよな？」

「ええ、ないわ。しなければいけない状況があるとは思えないけどその時は私が殺るわ。」

「なら引き受けた。」

「ありがとう。よろしくね。」

それじゃあ帰りましようか。」

「ああ」

そうして俺もスキマの中へ入つていった。

すでにずいぶんと日が昇つてゐるが誰も起きる気配がなかつた。

## 12話 買い物

早朝、朝帰りになってしまったが藍が俺たちを出迎える。

「おかえりなさい紫様、透夜。」

「ただいま〜」

「ただいま、藍。」

「どうでしたか？宴会は。」

「楽しかったわよ〜」

「ああ、俺もいろんな人と話せて楽しかった。」

「そうか。それはよかったな。」

それより紫様、もう少し早く帰ってくることはできなかつたのですか!!透夜も霊夢たちと同じぐらいなのですからしつかり寝れるときに寝ないと!」

「大丈夫よ藍。あなたは誰に対しても過保護すぎるのよ。それにいろいろと話し込んだんじやってたんだからしようがないじゃない。」

「はあくわかりました紫様。半日透夜を連れていたんですから明日は私が借ります。」

「別にいいわよ〜」

ん?どうしてそうなるんだ?

「ちよつと待て。俺の意思は?」

「関係ないな。透夜にとっても大切なことだからな。」

「なにするん?」

「明日の午後に人里へ買い物に出かけるぞ。食べるのがなくなってきたからな。」

オーケー。それなら問題ない。幻想郷の地理はスキマで移動しているおかげで全然わからないからな。

「わかった」

「それじゃあ午前中は自由に過ごせ。宴会とはいえ初めて会う人ばかりで疲れただろうからな。昼ごはんを食べたら行くぞ。」

「りよ〜かい」

「それじゃあゆつくりしていてくれ。」



そう言つて藍はどこかへ行つてしまった。  
いつの間にか紫もないし。

午前中に休みができたといつても特にやることがない俺はとりあえず自室に月華を取りに行った。

庭で刀を振っているうちに本格的に朝日が昇り、橙が起きてきた。

「おはよーございませす、透夜さん。今日は休みつて聞いていたのに刀振っているんですか?」

「昨日午後は何もやってないから少しでもやつておこうと思つて。」

「そうですね。藍様も何か用事があるようなので朝ご飯は作つてありませんたよ。」

「わかつた。あとで食べるよ。」

「それとお願いですが、ご飯食べたら私と遊びませんか?」

「ならさつさと食べてくるよ。」

「わあー、ありがとうございます。それじゃあここで待つていますね。」

「わかつた。じゃあ食べてくるよ。」

そう言つて俺は朝ご飯を食べに居間に向かつた。

最初は出てこなかつた橙が遊びに誘つてくれるなんて、嬉しいな。

弾幕ごっこではかなりしよげてたみたいだからてつきり嫌われたかと思つた。でも遊びに誘つてくれるつてことは少なくとも嫌われではないなみたいだな。

透夜はそんなことを考えながら藍の用意した朝食を完食し、庭に戻る。

「ちえーん、今戻つたぞ〜」

「お帰りです透夜さん。」

「それで、何するんだ?」

「追いかけてつこです。」

「はい、あの森でお昼まで追いかけてつこです。」

追いかけてつこかあ。妖怪である橙相手に体力がもつか?

まあ何事も経験だ。

「わかつた。それじゃあルールは?」

「ルールはですね、お昼までに私を捕まえたなら透夜さんの勝ち、捕まえられなかったら私の勝ち。飛ぶのは禁止。それ以外だったら能力でもなんでもオーケーです。」

能力を使えるんだったら場所はすぐにわかるな。

これでも森の大半は感知できるようになったぞ。多分。

実際、普段はそんなに広くは感知してないけどそれなりの広さは感知できるはずだ。

「私が森に入ってから10秒後に透夜さんはスタートです。それじゃあスタート!!」

そう言うのと橙は森の中に入っていった。

それを確認した透夜は頭の中で10秒数え、橙のあとに続いて森へ入っていった。

森の中は意外と暗く、木々が生い茂っているため見通しも悪い。そんな中、ここで遊び慣れている橙を探して、さらに追いかけるのはほぼ不可能だろう。

だけど能力を使えば難易度は多少下がるだろう。

透夜はそう考え、索敵範囲を広げる。森全体とはいかないがかなりの範囲を把握することができた。

そして透夜からあまり離れていない位置に橙らしき者を感知する。

しかし森の中に橙とも草木とは違うものも大量に感知した。

「橙はここからそう離れていない場所にいるけど他にもなんかあるな。まあとりあえず橙を追いかけるか。」

透夜は橙を捕まえることを優先し、橙以外の反応物はあまり考えないようにした。幸い橙は移動する気がないようであり動いていない。

「それじゃあ行きますか。」

そうして肉眼で橙が見える場所まで移動し、木の陰に隠れ、息を潜める。

橙は相変わらず逃げる様子がない。透夜に対して背中を見せ続けている。

よし、やるなら今だな。

そう思った透夜は橙に向かつて走り出したその時、足元で何かを切る感触がし、一拍遅れて上から網が落ちてきた。

それに驚き思わず声を出してしまう。

「うわっ」

そして、それに気づかない橙ではない。

「わーい、引っ掛かった引っ掛かった。」

罨にかかった透夜を見つけると、とても嬉しそうに近寄ってくる。

「この森には大量の罨が仕掛けてあるんですよ。動かさなきゃいけないものから今みたいなものまでたくさんあります。透夜さんは私の位置がわかるから動かさなきゃいけないのは使えないですが勝手に動くのには注意してください。それじゃあ頑張ってください。」

橙はそう伝えると逃げて行つた。

透夜も網から脱出すると橙を追いかけて行つた。

なるほど、この追いかけてこ体力だけじゃなくて罨にも注意をしなきゃいけないのか。状況判断もできるから遊びだけじゃなくてちゃんと特訓になつてる。

透夜は罨を躲しながら橙を追いかけるが橙のほうが速く、結局見失つてしまう。

さらに橙に隠れながら近づこうとしても化け猫である橙には気付かれてしまい捕まえられない。

橙が仕掛けた罨に掛けようともうまくいかない。

そして、結局橙を捕まえられないままお昼になってしまった。

\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*

「わーい、私の勝ち」

「ハアハア、速すぎるだろ橙。勝てないわ。」

「だってこの森は私の遊び場だもん。」

橙は誇らしげにそう言った。

「そりゃあ勝てないわ。」

「二人ともここにいたのか。もうお昼はできてるぞ。」

「藍(様)」

「ごめん藍。作るの手伝わなくて。」

「いや、大丈夫だ。今日は簡単なのにしたし、休んでいいって言ったからな。それに橙と遊んでくれたようだからな。逆に疲れただろう。」

「いや、全然大丈夫。楽しかったし。」

「そうか、ならいいんだ。」

「藍様」

今日は透夜さんに追いかけてっこをしてもらいました。」

「そうか、よかったな橙。」

「はい！」

そうしてお昼ご飯を食べながら嬉しそうに追いかけてっこのことを話した。

そして藍もその話を楽しそうに聞いていた。

—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*

俺と藍は今、ご飯を食べ終わり、買い物に来ていた。

「ところで藍、何買うんだ？」

「今日は主に数日分の食べ物だな。」

「ふーん」

「そういえば透夜は何か食べたいものはあるか？」

「食べたいもの？」

「そうだなあ、美味しければ何でもいいかな。」

藍とそんな話をしながらあることに気づく。

「魚って売っていませんね。」

「ああ、幻想郷には海がないからな。川魚をとるにも里を出ないといけないから魚屋はないんだよ。」

妖怪に襲われることを考えるとリスクが大きいからな。」

「へーって今更だけど藍は妖怪だけど人里に入っているの？」

「本当に今更だな。」

それはな幻想郷のルールで昼間は人を襲えないからな。まあ夜でも人里で襲えば霊夢が退治しに来るしな。だから知性ある妖怪は昼

間は人を襲わないし人里では夜も襲わない。外にいるなら別だがな。」

「へーそうなんだ。」

「それであとどれくらい買うの?」

「もう十分買ったからそろそろ帰るが。」

「ならちよつとお酒の選び方を教えてくれないか?」

「お酒か。なんでだ?」

透夜は藍に今、萃香に家を建ててもらっており、何か個人的にお礼がしたいと紫に言ったところ、萃香ならお酒がいいと聞いたことを藍に伝えた。

「そういうことか。確かに萃香には酒がいいな。」

「だが透夜、お金はあるのか?」

「あ・・・」

そうだった。こつちに来るときは寝ていたところを紫に拾われたからお金どころか何にも持ってきていない。それどころか外の世界にいた時も囚われていたから持ってこれるものもない。

透夜のお酒を買えないことを知った表情を見た藍はクスリと笑った。

「萃香には紫様が報酬を渡すから感謝の気持ちだけでもいいと思うぞ。それに、それ。」

「そう言つて藍は懐から一枚の厚みを帯びた封筒を透夜に渡す。」

「なんですか、これ?」

「いいから開けてみる。」

「そう言われ透夜は封筒を開ける。」

「ツー!」

中にはいくらかのお金が入っていた。

「えっ、藍、何これ?」

「何つてお金だ。紫様から透夜への報酬だそうだ。」

「報酬?」

「なんか仕事したつて、俺?」

「ああ、紫様からの監視の仕事を請け負つただろ。その報酬で先に

渡しておくそうだと。それだけあれば一か月は余裕だろうとのことだ。ちなみに監視の報酬はそれより少なくともはなるが、毎月始めに渡すようだ。」

「この金額なら確かに一人で生活するには余裕を持てるだろう。だが、

「いいんですか？まだ何もやっていないのにもらっても？」

「紫様が渡すと言っているのだからもらえばいいだろう。」

「それは紫様がお前に対してのお礼なのだから。」

「あ、ありがとうございます。」

「お礼なら帰った時に紫様に言え。」

「ほら、酒の選び方を教えてやるからさっさと酒屋に行くぞ。」

「そう言う」と藍は歩き始める。

「あ、ああ。ちよ、待ってよ藍。」

そして透夜は藍の後ろについていった。

## 13話 少女

買い物を終えた藍と透夜は家に戻り、夕飯の支度をしていた。

「ちゃんと夕飯に出す油揚げは残しておいてくださいよ。」

「大丈夫だぞ。まだまだたくさんあるからな。」

「それにしてもほんと、油揚げが好きだな。売ってたやつのはほとんど買ったんじゃないか？」

実際、何枚買ったのかはわからない。なんせ、店に入っただけで袋に入った大量の油揚げを渡され、お金を払って出たからだ。払うときに少し話をしていたが枚数については話していなかった。

「今日買ったのは一週間分で50枚だな。あそこで買っているうちに憶えられてしまつてな。」

そりゃあ憶えられるわ。一気にそんなに買うのも藍ぐらいだろうし。それにしても

「仲良さげだったな。」

その時を思い出しながら少し声を低めに言った。

「なんだ？嫉妬か？」

「そう。」

藍は笑いながら聞いてきたが、返ってきた答えがまさかのものだったのか顔を赤らめる。

「・・・冗談だ。妖怪と人が仲良くしているのがすごいなって思っただけだ。人は妖怪が嫌いって聞いたから。」

実際、妖怪は人間を食べるし、恐れられても仕方がない。

いくらルールがあつて襲わないといつても確かに恐怖はあるだろう。だけど今日見たのは皆笑っていた。

「・・・それはだな、時間をかけて歩み寄ったからだ。」

始めは妖怪は人里で買い物はおろか、入ることすら出来なかった。当たり前だ、妖怪を中に入れておけばいつ襲われるかわからんからだ。だが、時間をかけてお互い歩み寄っていった結果、今に至るわけだ。

人間の中には多くはないが妖怪とも仲良くしたいという奴らがいるからな。そいつらの子供を半人半獣の営む寺子屋に通わせたりし





そんな日常を送っていた彼女のもと、いや、町に一匹の黒き竜が降り立った。

この世界の竜と言えば数は少ないが魔獣の頂点に君臨し、残されている文献で過去に何匹か討伐された生物である。しかしそれはいくつもの国が集まり、大規模な作戦を行った結果、奇跡的に討伐に成功したのだ。だが、その時も作戦に参加した人の半数以上が命を落としている。そのため、大きいとはいえたかが町一つの抵抗など無意味なのだ。

だが、敵わないと知りながらも町の兵士と討伐屋は抵抗した。討伐屋をしている次男も戦場へと駆け出した。

町の人々は町の外へ逃げ出す。彼女の家族も急いで逃げ出そうとした。幸いにも竜がいる場所からは離れており、町の出入り口の近くに住んでいたため逃げるのも容易かと思われた。そしていざ逃げ出そうとしたその時、町にいくつもの黒い雷が降り注ぎ、彼女は意識を失った。

彼女が目を覚ましたのは次の日の朝だった。

目を覚ました彼女の周りには赤く燃え続ける木材、そしてまるで自分を庇おうとしたと思われる二つの焼け焦げた人だったものだった。

彼女は絶望する。焼け焦げた二つの死体は両親だと理解してしまったからだ。おそらく長男も死んでしまっただろう。

ならば自分もいつそこぞと思いい目を閉じ自らの死を待つ。

しかし、いつまで経っても熱くはならないし煙たくもない。

彼女は自分の状態を確認し、自分だけは全く燃えていない、それどころか熱さも感じないことに気付く。

とりあえず生きている人を探そうと何とかして倒壊した家から出るとすでに竜はいないが、周りの建物はどれも全壊し、燃え、生きているなんてありえない状況だった。

しかし、彼女は泣きながら探した。そして竜が降り立った場所に足を踏み入れる。そこには戦った形跡が、いや、一方的に殺された跡があった。地面にはいくつものクレーターができており、ところどころに乾いた血が残っている。その上にはおそらく兵士がつけていたと

思われる武器や防具が潰れた状態で落ちていた。そして、彼女にとってよく見慣れた一本の剣が目に入る。急いで剣に駆け寄り、よく見ると、それは次男の持っていたものだった。そしてその隣には焼け焦げた死体。

彼女は絶望する。なんでこんな目に遭うの？なんで自分だけ生きているの？なんで自分から幸せを奪っていくの？そんな思いが彼女の脳内を駆け巡った。

そして、彼女は彼女なりの答えを出した。そう、全部魔獣がいるからと。魔獣がいるから幸せは壊されるのだと。

ならば魔獣を駆逐すればいい。もう自分のような人が生まれないように。

そうして彼女は兄の剣を抱え、この町を後にした。

その後、彼女は次男と同じように討伐屋として働き始めた。

討伐屋を始めて少し経ったときに彼女は数少ないアビリティ保持者だと知る。そしてその能力は『炎帝』というもので、炎を生み、操るものということも。

そして、彼女が討伐屋に彼女の名が知られてきたころ、一人の男と出会い、とある計画に誘われる。それは魔獣の持つ力を人に移す、つまり人工的にアビリティ保持者を生み出し、魔獣を殲滅させるという計画だった。魔獣を駆逐したい彼女にとってやり方はともかく魔獣に対抗する戦力を作る話はおいしかったためその話に乗った。そして現在に至る。

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——

レイナは相変わらず愚痴をこぼしていた。

「つたく、こっちの準備なんてほとんどねえんだからせめて三日で準備しろよあのチビ。大体いつも動くのがおs「コンコン」・・・はあ、入っていいぞ。」

レイナが愚痴をこぼしていると部屋のドアがノックされ、一人のユウナがドアを開く。

「失礼しますレイナ様。準備が整ったようなのでそのご報告に。」  
「あー良かった。すぐ行く。」

「それと、主への愚痴はほどほどにしてください。」  
「お、おう。」

レイナはユウナから今にも人を殺しそうな視線を注がれ、軽く冷や汗を掻きながら主のもとへ向かった。

—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*

「・・・来たか。」

男は青く光る魔法陣の前に立っていた。

「来たかじゃねえよ。待たせ過ぎだ。」

レイナは自分の主に対して疑うような態度で話す。それと同時に後ろから殺人光線が注がれる。

「悪いな。で、準備はいいな?」

「ああ、いつでも行けるぞ。」

「それじゃあユウナ、お前は部屋から出ておいてくれ。」

「わかりました。」

男がそう言うときユウナは素直に出ていく。

「いやあ、ありがとね。あいつの視線は居心地悪くてな。」

「お前が態度を直せばいいことだろ。」

それで今回の任務はわかっているよな。」

「ああ、108番の回収だろ。生死は問わずで。それで質問だ。もし向こうで見つからなかった場合はどうすればいい?」

「向こうと繋ぐときに様子を見たがあいつの気配を感じたから死んだということはない。必ず回収して来い。」

「了解。」

「それじゃあ始めるぞ。」

男がそう言うときレイナは魔法陣の中に移動し、中に入ったことを確認すると男は魔法陣に向かって手を掲げる。すると、魔法陣の光は次第に強くなっていく。そして光が爆ぜると魔法陣の中にはレイナの

姿はなかった。

## 14話 紅魔館

今日は先日、レミリアにお呼ばれされた『紅魔館』に向かっていた。で、今は霧のかかった大きな湖の前にいた。

「うわあく霧が薄いといつてもそんなに前は見えねえな。」

なんかでかい反応があるからそれが紅魔館なんだろうけど。」

そういえば幻想郷を一人で動くのは初めてだな。いつもは藍がいたし、まあ後ろについてきてくれるようだけど。ここまで助けとかはなかったしな、一人だろ。

「そんじゃ、行きますか。」

そう言つて透夜は紅魔館と思われる反応に向かって湖の上を飛んで行った。

透夜が紅魔館に向かって飛んで行った後、透夜がいた場所から少し離れたところに藍が姿を現す。

「全く紫様も無茶を言う。」

『透夜が心配だからつてばれないように後をついてつて』つて透夜には能力で即ばれじゃないですか。

それに十分強いから大丈夫だとは思いますが……。とか言つてこうしているのだから私も透夜のことは心配というわけか。」

そう言つて藍も透夜を追いかけ、湖の上を飛んで行った。

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——

湖の中心から紅魔館に向かっているとだんだんと霧が晴れ、紅魔館の姿が目映った。

「おつ、多分あれだな。」

そう言つて透夜は門の少し手前に降りると、そこでは赤い髪をした女性が5人の少女と遊んでいた。

透夜はとりあえず赤い髪の女性に話しかける。

「あの、すみません。ここが紅魔館ですか？」

「え、はい。そうですけど、何か御用ですか？」

「あー、レミアに用があるんだけど・・・。」

「わかりました。ちょっと待っててください。」

それじゃあチルノさん達、ちょっとお仕事してきますから少しの間待っていてください。」

「わかった！めーりんは仕事をしないとメイドちよーに怒られるからな。」

「あはは、それじゃあ行ってきます。ルーミアさん、その方はお客さんなので食べないでくださいよ。」

そう言っただけで女性たちは館の中に入っていった。

すると、女性と話していた青い服の少女が話しかけてきた。

「お前、始めてみる顔だな。なんていうんだ？」

「食べてもいい人類？」

おい、金髪少女、話聞いてなかったのか？

「し、失礼だよチルノちゃん。」

「ルーミアも。」

「わはー」

・・・ちよつと試してみるか。

「俺は黒風透夜っていう。さっきのヒトも言ってた通り

食べたならダメな人間だ。」

「そうか。あたいはち「ちよつと待て。」ん？なんだ？」

「お前の名前を当ててやろう。」

「おっ？よし！じゃあ当ててみる。」

「そうだな、お前の名前は・・・『チルノ』だろ。」

「!!」

「おお！あたいそんなに有名なのか！」

「おお」

「それでお前は『ルーミア』だろ。」

「!!」

「すごい!!すごいぞ、こいつ。さいきよーのあたいはともかく、ルーミアの名前まで当ててるなんて。」

「すごいのだー!!」

そんなやり取りを見ていた残りの三人はちよつと困った感じで笑っている。まあ、すぐに驚かせてやる。

「それで右から順番に『大妖精』に『ミステイア』、『リグル』だろ。」  
「!!!」

俺が三人の名前を言うと笑っていた三人の表情が一気に驚いた表情に変わる。

「おー!!みんなの名前を当てるなんてすごいなお前。」

「美鈴さんに名前を呼ばれてたチルノちゃんたちはともかく。」

「私たちの名前まで。」

「なんで。」

おおー、程よいぐらいに驚いてる。面白いな、こういうの。橙と話しているときよく出てくるからな。憶えておいてよかったわ。

そんな感想を心の中で抱いていると一瞬軽い頭痛が襲い、すぐ後ろから話しかけられた。

「こんにちは、透夜さん。ところでこれ、どんな状況ですか?」

確かに傍から見ればよく分からない状況だよな。二人は目を輝かせながらこつちを見てるし、残りの三人はなんか考えているし。

「こんにちは、咲夜さん。ちよつと遊んだらこうなっちゃって。」

「はあ、何をしたらこうなるのですか?」

それと私のことは咲夜で構いませんよ。」

「そうか?なら俺も透夜って呼んでくれ。敬語もいらないぞ。」

「わかりました。ですが今日はお嬢様のお客様なので。」

咲夜とそんな話をしていると咲夜を呼びに行った女性が頭にナイフが刺さった状態で戻ってきた。

「うう〜ひどいですよ咲夜さん。ちゃんと仕事したじゃないですか。」

「あつ、彼女が門番の『紅 美鈴』です。」

「えっ、無視ですか。あつ、初めまして透夜さん。紅美鈴です。気軽に美鈴と呼んでください。敬語は癖みたいなものなので気にしないでください。」

「わかった。とりあえず初めまして、黒風透夜です。よろしく。」





そう言うのと咲夜はお茶を準備しに部屋を出た。

「立って待っているのもあれだからその椅子にでも座りなさい。」  
そう言うってエミリアは部屋の隅にある椅子を指さす。

俺はその椅子を机の前に置き、レミリアの正面に座る。

「悪いな。」

「いいえ、客人ですもの。立たせておくのもいけないわ。

それと、『空間把握』は切っておきなさい。」

「それまたなんで？」

「あなた、瞬間移動とかしたりされたりすると頭痛がするでしょ。」

あれ？俺、レミリアにそのこと伝えたっけ。まあいいや。とりあえず言われた通り切っておこう。

「ああ。それで、一応切っておいたけどなんでだ？」

「咲夜の能力、『時間を操る程度の能力』で時間を止めて移動するからよ。」

「なるほど。空間系の能力だと思ってたわ。」

だから急に後ろにいたりするのか。って、時間を操るってかなりの反則だろ。

と、そんなことを考えていると、いきなり咲夜が現れビックリする。ついでにテーブルもセットおり、上には色とりどりのお菓子が並べられている。

「お待たせいたしました。」

「ありがとう咲夜。」

それじゃあお茶にしましょう。」

レミリアはそう言うのと咲夜の準備した椅子に移動した。

透夜もレミリアの向かいの椅子に座る。

「なあレミリア、今日は……。」

「わかっているわ。記憶を思い出しに来たんでしょ。」

ただもうちょっと準備に時間がかかるみたいだから待ってちょうだい。準備できたら咲夜が呼びに来るから。」

そう言われ部屋を見渡すといつの間にか咲夜はいなくなっていた。

「ホントに便利だな、咲夜の能力。」

その後、レミリアとは少し世間話をして時間を潰した。今聞いているのはレミリアたちが起こした紅霧異変の話だ。

「と、まあ霊夢たちと出会ったのはこんな感じね。」

「お嬢様、準備が終わったようです。」

丁度、レミリアたちと霊夢の出会い話が終わったところで咲夜が戻ってきた。

「ありがとうございます。それじゃあ行きましょう。」

「ああ。」

そうして透夜はレミリアに連れられ部屋を出た。

## 15話 過去

透夜たちは今、薄暗い廊下を歩いていた。

しばらく歩いていると廊下の奥にひと際大きい扉が見えてきた。

「着いたわよ。」

レミリアはそう言つて大きな扉を開く。

するとそこはたくさんの本が並べられていた。

「……。」

あまりの本の量に呆然としていると隣にいるレミリアに軽く小突かれる。

「なんて顔してるのよ。」

「いや、だつて、いくら何でも多すぎだろ。」

「だからつてそんな顔はしないでちょうだい。まったく……。」

そう言つとレミリアは奥へと進んでいく。透夜も周りの本を見渡しながらかレミリアについていく。

部屋の奥には薄紫色のパジャマを着た少女がこちらに気付くことなく、読書をしていた。

「パチエ、来たわよ。」

レミリアが声をかけると少女は本を読むのをやめ、口を開いた。

「いらつしやい、レミイ。それと透夜。あなたのことはレミイから聞いているわ。私は『パチュリー・ノーレッジ』。あなたのことは名前で呼ぶから私のこともパチュリーでいいわ。よろしく。」

「ああ。よろしくパチュリー。」

「それじゃあ早速だけどやることするわよ。」

パチュリーはそう言つと立ち上がり、大人が一人横になれるぐらいの大きさの不思議な模様の描かれた台座の横に移動した。

透夜とレミリアもそこへ移動する。

「一応今から何をするか教えるわ。」

今から透夜には三つ、魔法をかけるわ。一つ目は『記憶調査』<sup>メモリー・サーチ</sup>、どんな感じで記憶が封じられているか調べる魔法。二つ目は『解錠』<sup>アンロック</sup>、これは封印を解除する魔法。そして最後に『記憶確認』<sup>リ・コール</sup>、これはあなたの

記憶をあなた自身が第三者の視点で強制的に振り返らせる魔法。と、まあこんなものね。」

—ズドーン—

丁度パチュリーがこれからやることについての説明を終えた時に玄関のほうから大きな音がした。

すると、レミアは「パチン」と指を鳴らすと同時に「咲夜」と一言声をかけると目の前に咲夜と縄で縛られた魔理沙がいた。

「こんにちは魔理沙。」

「よ、ようパチュリー、レミア。それに透夜もいるのか。」

「おう。で、お前何したんだよ。パチュリー、笑っているけど笑ってないぞ。」

「いや、本を借りているだけだぜ。」

「あなたが盗んで行った本、一冊も戻ってこないのだけれど。」

パチュリーは笑っているが誰が聞いても怒っているとわかる声で魔理沙に問い質す。

それに対して魔理沙は堂々と

「死ぬまで借りているだけだぜ。」

と、答えるに、この場にいる魔理沙を除く全員が盛大なため息を吐いた。

「悪いわね魔理沙。今日はあなたに付き合っている暇はないの。だからここでじっとしていなさい。悪いけど咲夜、魔理沙のこと見張っていて欲しいのだけれど。いいわよね、咲夜、レミィ。」

「ええ。屋敷を荒らされるのも嫌だからそのほうがいいわね。それじゃあお願いね、咲夜。」

「了解しました、お嬢さま。」

そう言って咲夜は魔理沙を縛っていた縄を外す。

「と、言うことだから。逃げようと思わないことね。」

「わかってるぜ。お前相手に逃げ切れるわけないからな。逃げてもまた捕まるのがオチだぜ。」

魔理沙が逃げる様子がないのを確認してからパチュリーは透夜に台座に横になるよう指示する。透夜もそれに従う。

「それじゃあ始めるわ。一度、目を閉じてちょうだい。何か見つけたら起こすからリラックスしててちょうだい。」

「わかった。」

そう言っただけで俺は目を閉じ、パチュリーが何かを唱え終わると同時に、自分の中に何かが入ってくるのを感じながら意識を手放した。

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——

気が付くと俺は知らない場所にいた。

見たところどこかの村の様な場所だ。子ども達は元気に駆け回り、大人達は農作業をしている、何も変哲のない村だ。ただ一つ違うところを上げると、一部の子どもにはバラバラだが皮膚の一部が鱗のように変化している事だ。

とりあえずここがどこか確認しないと。俺は近くの人に話しかける。

「すみません、ここがどこなのか教えてもらってもいいですか？」

しかし、話かけられた住人はまるで俺がいないかのようにどこかへ行ってしまった。

仕方なく他の人に話しかけるがどれも同じ反応で何も情報を得られなかった。

仕方なしに立ち尽くしていると自分の身体が半透明になったいることに気付き、思い出す。

(あなたの記憶をあなた自身が第三者の視点で強制的に振り返らせる魔法。)

「なるほど、だから話しかけても反応がないのか。俺はここに存在しないからな。と、言うことはこれが俺の記憶。」

そんな独り言を呟いていると、今まで何を言っているかわからなかったところに一際鮮明な声が俺の耳に届いた。

「へえーそうすれば竜化出来るんだー。やっぱりライラちゃんは凄いなー。他のみんなもやり方は知らないし、僕なんてまだ竜化もして無いのにもう竜化の仕方が分かっちゃうなんて。」

声のした方を見ると黒髪の男の子と金髪の女の子が何やら話していた。

なんとなくだけでも黒髪の男の子が自分の様な気がした。とりあえず会話を聞いておこう。

「大丈夫だよ。シオン君もきつとできるよになるよ。」

だって私たちと同じ竜魔族なんだから。」

「そうだよねーきつとできるようになるよね！」

そう言っつてシオンとライラは笑いあつた。

その時のシオンは笑つていたが、少し寂しそうな顔をしていた。

その日は特に何もなく、穏やかな1日が過ぎ、夜になった。

とりあえずわかつたことは自分の元の名前がシオンつてことと友達の名前がライラつてこと。それと自分が人と魔獣の間に位置する竜魔族つてことだけだつた。

シオンが眠り、何時間か過ぎ、何をするか考えている時、不意にシオンが起きた。そしてそのままどこかへ移動する。俺は不審に思い、シオンを追いかける。そして、追いかけた先にはシオンの両親がいた。2人とも左胸に穴を開け、血を流した状態で。

「ッー」

俺は思わず息を呑んだ。

俺が来る間に何があつたんだ？分かつている。シオンが両親を殺した。でもどうやって？確かに竜化出来れば殺せそうだがシオンは出来ないはず。

そう思いシオンを見ると腕は竜化されており、腕どころか左目も元の綺麗な黒い目の面影など全くなく、黒目の中心に紅い縦線の入った爬虫類の様な目をしていた。更に左目の周りも黒い鱗に変化しており、何かを咀嚼していた。

シオンは壁を壊し外に出ると、様子を見に来た住人を、子どもとは思えない動きで次々と殺していった。

大人たちはシオンを止めようと竜化をするが全く歯が立たず、俺はその様子をただ呆然と見ていた。

これが俺なのか？これが俺の過去なのか。

もう一度、シオンの方を見るとシオンの足元には両親と同じように左胸に穴を開けた金髪の女の子、あんなに仲が良さそうだったライラが横たわっていた。

「うわああああああああ!!!」

俺は叫びながらシオンに向がって走り出し、意味は無いことを理解した上で拳を振りかざす。が不意にシオンと目が合い足を止めてしまう。まるで、夢に出てきた竜を前にした時のように足が動かない。見えていないはずなのにシオンはこつちを見ているようだった。

「ッー」

俺は声にならない悲鳴を上げる。まるでそれを見ているかのようなシオンは鮮血に濡れた口を三日月のように開きながら嗤うと俺の視界は闇に包まれた。

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*

「やあ、初めまして。」

俺はシオンに与えられた恐怖を飲み込み、声のした方を見る。

そこには俺、つまり成長したシオンが立っていた。

俺は1歩後ろに退る。

それを見たシオンは笑いながら話し始める。

「そんな警戒しないでよ。僕は僕に危害を加えるつもりはないから。」

それでも俺は警戒を解かない。

「まああんなの見た後だからしょうがないか。」

ひとまずそのままでもいいから話を聞いてよ。」

そう言って話始める。

「僕の名前は「シオンだろ。」って、流星にそれは知ってるか。まあつまり、記憶を失う前の君さ。」

シオンは笑いながら俺を指さす。

だろうな。だって俺とまんま同じだもんな。

「あれ？驚かない？まさかこれも予想通り？」

「ああ。」

「おつ、やっと返事してくれた。」

そんなシオンの穏やかな反応を見て警戒を解く。

「おつ、警戒も解いちやうの?」

「ああ。お前を見ていると警戒してるのも馬鹿らしく思えてきたからな。」

「馬鹿って僕は君だよ?」

「だから結構シヨックを受けてる。」

そんなことより何の用だ?」

「そうだったそうだった。君の記憶がない理由。いや、なかった理由の方がいいかな。それを教えに来たんだ。」

「俺の記憶がない理由?」

「そう。」

シオンはヘラヘラした態度を改め、真剣に透夜と向き合った。

「君の記憶がない理由、それは僕自身が記憶を封じたから。そしてその影響で生まれたのが君さ。」

「どういう事だ?」

「そのままの意味だけど、もつと詳しく言えばあの力を記憶と一緒に封じた。あの力を使わないために。その結果、生き方は覚えているけど自分が何者かわからない君が生まれた。まあ完全には封じられなかったみたいだけど。」

「それって・・・」

「そうだよ。雷を操る能力、元はライラが持っていた能力だよ。まあ僕的能力も多少は使っているみたいだけど。」

そう言ったシオンは悲しそうな顔をした。

「で、何でお前はいるんだ?自分で自分を封印したもんだろ?」

「それは透夜が僕であった時を思い出したから。」

まったく、出来れば思い出して欲しく無かったんだけどな。」

そう言いながらシオンは頬を膨らませながら怒った。

「それ、お前がやっても気持ち悪いだけで。真面目に俺ってこんなだったのか。」

ところで、お前の能力って何だ?」



「あれ？気づいてない？元々の僕の能力は『黒化』って言っているいろいろと強化する能力。まあ今はいろいろ混じっているから良く分からないけど。君のいる幻想郷ってところで言うと思うだ・な・・『混沌を操る程度の能力』とでも言っておこうかな。」

自分の能力を言った瞬間、シオンから圧倒的強者の出すオーラが出る。そのオーラを前に俺は足をすくませる。

「だけどこの能力は完全には君には使わせないよ。使わせるのは今まで通り『黒化』だけ。完全に使う時は僕が表に出た時と君なら使いこなせると思った時だけ。あつても竜化は使えるよ。君が夢で見た時のようにはなれないけど、さつき見たのぐらいなら使えるよ。」

能力の話が終わり、竜化の話になった途端今までの様にヘラヘラした態度に戻った。

「おい、表に出た時ってどういう事だ？」

「君が意識を失って僕が動きたい時だよ。その時のことは君は覚えていないだろうけどね。」

そう言いながらシオンは後ろに向いて手を振った。

「それじゃあまた会う時まで。」

「ちよっ」

そうして俺は意識を現実に戻した。いや、戻された。

戻る直前に小さな声だったがシオンが「月華によろしく」って言ったような気がした。

## 16話 紅魔館

シオンと話し終え、目を開くと目の前には魔理沙の顔があった。

「おっ、やっと起きたぜ。」

「ん、おはよう。」

そう言つて上体を起こし、周りを見ると、レミリアはお茶を飲んでパチュリーはその相手、咲夜はレミリアたちのお茶を淹れていた。

その様子を見て、少しは様子を見ろよ。なんて思っているとレミリアと目が合う。

「あら、起きたのね。」

その声でパチュリーも俺が起きたことに気付く。

「おはよう。思ったより起きるのが早かったわね。」

そう言っていると読んでいた本を閉じ、話を続ける。

「それで、思い出せたのかしら?」

「ああ、つて言つても少しだけだったけど。」

「だから起きるのが早かったのね。」

「あれで早いのか?あれこれ四時間ぐらいは経っているぜ。」

と、俺の様子を見ていたっぽい魔理沙が話に入り、パチュリーに質問する。それに対しパチュリーは俺にもわかるような説明を魔理沙に返す。

「ええ、早いわよ。だって私が今回使ったのは今までのすべてを思い出す魔法。透夜の歳を今回15と仮定しても早くて5日、遅くても一週間つてところよ。普通に考えてもそんな膨大な情報量を一気に取得できるわけないでしょ。そんなことをしたら大量の情報を処理できなくて脳がダメになるわよ。だからなんでもかは知らないけど一部とはいえ私の予想よりは早かったわ。」

「うっ」

パチュリーの厳しい口調での返答に魔理沙は言葉を詰まらせる。それを見たパチュリーは魔理沙から視線を外すと話しの続きを話し始める。

「それで?少しつてどこまで思い出したのかしら?」

「えっ、ああ。俺が思い出せたのは小さい時の一日だけだったな。一日が終わったところで急に意識が引つ張られた気がして、気付いたら目覚めてた。」

俺は思い出したところだけを話したが、その後のシオンとのやり取りは話さないことにした。

「そう。どうやって私の魔法を強制終了させたのかは気になるけど、今日のところはこれくらいにしておきましょう。精神的にもキツイでしょうし。」

そう言われ、自分が疲れていたことに気付く。

まあ、あんなもの見たんだからしょうがないな。

「なんか、一気に疲れが来たわ。ちよつと休んでいっていいか?」

疲れを少しでも取って帰りたいな。竜化も慣れておきたいから戻ったら修行したいし。

そう思っていると今まで黙って話を聞いていたレミリアが空いている部屋を一つ貸してくれた。

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——

「椅子とベットしか置いていないけどゆつくりしていってね。帰る時とか何か用がある時は咲夜を読んでちょうだい。」

「わかった。ありがとな、レミリア。」

「これぐらい礼を言われることじゃないわ。それじゃあゆつくりしていってね。」

そういうとレミリアは自室に戻っていった。あんまり長居しても迷惑だろうから少し睡眠をとったら出るとするか。それにしても……「なんでいるんだ?」

「いいだろ別に。透夜だつて一人じゃ寂しいと思つてな。」

「いや、少し寝るだけだから寂しいなんてねえよ。」

「本当に大丈夫か?」

魔理沙はとても心配している表情でこつちを見ていた。

「なんでそんな心配そうにしてるんだよ。」

「だって透夜が寝てた時、一回だけすごいなされていたからな。友達なんだから心配するぜ。」

そう言うのと魔理沙は少し暗い顔をする。

それを見た透夜は少し心を痛めた。

「その、しんぱいしてくれてありがとうな。でももう大丈夫だから。」  
それを聞いた魔理沙は笑顔をつくるがやはり少し暗さが残っていた。

「そうか。それじゃあ私は行くぜ。」

そう言つて魔理沙は部屋を後にした。

透夜はそれを見送った後、ベッドに倒れこむようにして寝ころんだ。  
だ。

「・・・あんまり気になんなかったけどかなり疲れてるな、俺。」

そう言つて目を閉じるとほどなくして意識を落とした。

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*

眠りに落ちてから約一時間後、透夜は目を覚まし、すぐに出る準備をした。

と、いつても持ってきたものなんてないから準備と言つても意識をしつかりと覚醒させることだけだけど。今日は荷物になるから月華も置いてきている。

透夜は顔を二、三回軽く叩くと咲夜を呼ぶ。

「なんででしょうか、透夜様。」

「あつ、咲夜。休ませてくれたおかげで疲れも取れたからそろそろ行くわ。」

「わかりました。それじゃあ門まで見送りに。」

そう言つて二人で門まで行くと門の前で美鈴が寝ていた。

来たときはチルノたちと遊んでて今は昼寝、美鈴って仕事してんのか。

「まったく美鈴ったらまた寝て。」

咲夜が呆れながらそう言った瞬間、美鈴の周りに無数のナイフが出

現し、襲い掛かる。寝ている美鈴が避けられるはずもなく全弾命中。周りに叫び声上がる。  
「ぎやあああああ!!」

美鈴に刺さったナイフを抜き、少し治療したところで美鈴が咲夜に話しかける。

「咲夜さん酷いじゃないですか。ちよつと寝てただけなのに。」

「何がちよつとよ。毎日寝てるじゃない。それに起きているときだつてそこら辺の妖精と遊んで仕事してないじゃない。」

「だからってナイフは酷いですよ。」

「別にいいじゃない。こんなんじや死なないでしょ。」

「確かに死なないですけど痛いんですよ。」

「仕事しない美鈴が悪いと思うけど?」

「うっ、けど大事な時にはちゃんとやっていますよ。」

「いつもやりなさいよ。」

「私だつて暇なんですよ。一人でずっと立っているのは。」

わーわーぎやーぎやー

美鈴が何か言えば咲夜が正論で返す。それをさらに美鈴が文句を言いながら言い返す。そんな構図が出来上がっていた。

放っておくといつまでも続きそうだな、これ。

「おーい二人とも、もういいんじゃないか?」

とりあえず二人を止めると咲夜は凜としていたが美鈴は涙目になつていた。

「そうね。美鈴が寝ているのはいつものことだし、今何か言っても今すぐ治るつてわけじゃないものね。」

「そうですよ。何をいまさら言ってますか咲夜さん。」

咲夜はあきらめたように言うと言と美鈴は開き直つて反論する。あつ咲夜、美鈴の首を絞めるな。

「今回はありがとうな。」

「私は何もしていないわ。お礼はお嬢さまとパチュリー様に言いなさ

い。」

「じゃあレミリアたちに伝えといてくれ。」

「わかったわ。」

「それじゃあ、またな。」

「ええ、また遊びに来てちょうだい。その時は歓迎するわ。」

「また遊びに来てくださいね、透夜さん。」

「ああ、またな。」

そうして俺は紅魔館の門を出た。

図書館に魔理沙が泥棒に來たり、美鈴が咲夜に殺されかけたり、半日しかいなかったが、なかなか楽しい半日だった。

まだ明るい日は傾いてきており、それに加え人里のほうには雨の降りそうな雲が見えるため急いで八雲家に向かった。

17話 VS レイナ①

透夜は今、湖のすぐ上を水しぶきを上げながら飛んでいた。

沈みかけていた太陽は厚い雲に隠れ、強くはないがすでに雨も降りだしてきている。

「うわあ。これ家に戻るより博麗神社に行つて雨宿りするほうがよさそうだな。紫も顔を出しそうだし。」

そう言つて俺は雨宿りするために速度を上げ、切つていた能力を万が一のために発動させる。

とりあえず近くに危険なのはないな。

湖を渡り切り、安全を確認すると高度を民家よりも少し高いところまで上げ、人里の上空に入ろうとしたとき、不意に目の前で爆発が起きる。そのため俺は爆風に錐もみされながら地面に落ちる。

「チツなんだなんで急に爆発したんだ？」

そう言いながらも俺は周囲に怪しいものがないか確認する。しかし爆発したところには何もなく、周りにも何もなかった。いや、一つあったのが湖の周りの森にあった反応がこつちに向かってきていることだ。ちなみに藍だと思われる人里の前にある反応も見つけているがこつちは特に動く気配がない。

ひとまずこつちに向かつてくる反応の方向を見てみると急に森から火の気が上がる。そしてその中に見覚えのあるシルエットを見つけ、一瞬で血の気が引く。

「なんであいつがここに・・・」

自分でも聞こえるかわからないぐらいの声だったが、まるで聞こえたかのように火の中の人物はこつちに向かって走り出す。

「見つけたぞ108ばああああん!!!」

透夜は一步後ずさり、スペルカードを宣言する。

「雷電『雷光蟲』!!」

透夜の周りから無数の電気の球があちこちに散らばっていく。もちろん突っ込んできた人物の方向にも飛んでいく。

それを見た襲撃者は走るのをやめると中腰で居合切りの姿勢を作

る。すると右手から炎が噴き出し刀の形を作り出す。そしてそのまま火で出来た刀を振り抜き正面に来ていた透夜のスペルを消滅させる。

「久しぶりだな108番。脱走した罪は重いぞ。」

「な、なんでここにいるんだよ、レイナ。」

「あ？そりやお前を回収しにさ。お前は数少ない成功体みたいだからな。てか私の名前憶えてんのか。」

「そりやお前中弄られれば嫌でも覚えるわ。」

よし、こつちの話に乗ってくれたみたいだな。クソ、こんなことから月華を置いてくるんじゃないやなかった。レミアのところだし必要ないなって思った自分を殴りたい。

「ふーん。お前、記憶無くなったと思ってたのにまだ残ってたんかよ。」

「嫌な記憶ほどずっと憶えてるんだよ。」

よし、藍が月華を持ってきてくれたみたいだな。

「で、時間稼ぎはもういいか？それじゃあ死ぬね！」

そう言ってレイナは炎の刀を振りかぶる。が、それは透夜に届くことはなかった。

レイナは自身の攻撃が阻まれたと知るとすぐに後ろに飛び、距離をとる。

目の前では藍が結界を張っていた。

「助かった。ありがとう藍。」

「まったく、武器はしつかり持ち歩きけって言うておいたはずなんだが？」

そう言って刀を投げ渡す。

「すまん、今回は必要ないと思った。」

「これに懲りたらしつかり持ち歩け。」

藍はそう忠告すると不機嫌になっているレイナの方を見る。

「で、うちの透夜に何か用か？」

「用も何もそいつをこつちに渡せよ。」

「悪いが透夜はうちの者だ。渡すわけにはいかないな。」



「そう。なら死ね！」

レイナは炎の刀を振りかぶってこっちに攻撃してくるが、藍の結界が攻撃を防いでいる。

そんな中、藍はこちらを振り返る。

「透夜、あれはお前の敵だろ。だからお前が決着をつけろ。」  
「え？」

「あいつに身体を弄られたんだろ？ならお前がやるべきだ。その怒りをあいつにぶつけろ。あいつを乗り越えろ。」

「ああ。それもそうだな。」

「ふふ、勝ってこい透夜。死ぬのは許さないからな。」

「死なねえよ。少なくとも恩を返すまでは。」

「いくぞ！」

俺は藍の掛け声で居合切りの姿勢をとり、結界が消えると同時にレイナに向かって駆け出す。

レイナは結界を壊せないかと悟ったのか離れた場所で結界が消えるのを待っていた。そして透夜が動くと同時に動き出す。

「やつと動いたか。」

そう言いながら五発の火球を飛ばす。

しかし俺はそれをすべて躲し、レイナとの距離を詰める。

そして刀の射程範囲に入ると同時に一気に振り抜く。

「ハアアア!!!」

「爆。」

しかし攻撃がレイナに当たる瞬間に二人の間で爆発が起き二人とも吹き飛ばされる。

俺は地面を転がり、立ち上がると同時に月華に妖力を流し込む。月華は俺の妖力に反応し地面から茨を生やし、レイナを捕縛しようとする。

レイナも捕縛しようとする茨を躲しながら接近するが、足元から急に出てきた茨に反応出来なかった。

「な!!」

茨に捕らわれたレイナはあつという間に全身を巻きつかれ、茨の中

に閉じ込められた。

透夜は地面から刀を抜き安堵のため息をついた。

しかし、安心した次の瞬間、茨と茨の隙間から炎が溢れ、ついには耐えきれなくなったのか炎が茨を包み込み崩壊する。

中から出てきたレイナは棘の刺さったと思われる場所からは血が流れているがさほどダメージは入っていないようだった。

「チツやってくれるじゃねえか。もう面倒だし本気で行くか。」

そう言つてレイナは何もないところから一振りの大剣を取り出す。

それに対し俺はまともに打ち合つても分が悪いと感じ、後ろに下がり刀を鞘に戻すと同時にスペルカードを使う。

『雷電 『雷光蟲』!!』

「またその技か!」

雷光蟲はさつきと同様あちこちに散らばつていくがレイナの前行つたものは大剣によつてかき消されている。それどころか周りにある雷光蟲も風圧によつて消滅する。

純粹に靈力や妖力で出来た弾幕を放つたがそれらも雷光蟲と同様、消滅させられてしまった。今も打ち続けてはいるが足止めにもなつていなかった。

まったく効かない自分の攻撃に思わず齒がみをする。

こんなことなら攻撃用スペルも作つておくべきだった。

『黒雷砲』は火力が高い分、隙が大きいからな。『スパークフィード』も攻撃用じゃないし。

そんなことを考えている間にもレイナはこつちに向かい大剣を振り回しており、接近されてしまえば今の透夜には逃げることしかできなかつた。しかし、今の状況を突破する方法を考えてしまつていたせいか横から来た大剣に対処できず吹き飛ばされる。

幸いにも切れ味は良いというわけではなく軽く斬られ、吹っ飛ばされるだけで済んだ。

しかし、大剣自体が熱いのか傷口が尋常でなく熱い。

傷口からは血が流れているため火傷はしていないが火傷の一步手前といったところだろう。

俺は傷口を手で抑えながら立ち上がる。

「私の一撃を食らってまだ立つのか。大抵の奴なら気絶するか死ぬるだけだな。」

レイナは自身の大剣を見ながら続ける。

「やつぱり切れ味はいいほうがいいな。浅く斬ったところをそのまま熱で苦しめようと思ってわざと切れないようにしたけど思い切りやってあの程度ならやつぱ駄目だな。」

それを聞いた俺はイチかバチかシオンに教えられたことを試す。

あれだつたら接近戦もできるし防御もできるはずだ。成功するかわからんが。

心の中で成功したときをイメージし、短くつぶやく。

「竜化」

すると腕の皮膚がどんどんと罅割れ、黒い鱗に変化していく。それに加え腹の傷の周りにも竜化を施す。

それを見たレイナは苦虫を潰したような顔をする。

「お前、竜魔族だったのかよ。めんどくせえな。それに黒い鱗とか嫌なものを思い出させる。」

俺はレイナの言ったことを無視し、続けてシオンの応力を使う。

「黒化」

黒化を施すと一瞬意識を持っていかれそうになるがどうかからえ、目を開いた。

すると黒化を施す前は透き通るような黒色だったのが黒化した後はまるで光を逃さないような漆黒に染まっていた。

俺は驚いている藍に刀を投げ渡す。

「悪い藍。預かっといってくれ。」

「あ、ああ。了解した。だがその姿は「悪い、こいつを倒したら全部話す。」・・・そうか。わかった。」

藍が聞き終わる前に後で伝えることを言うと言いと素直に聞き入れてくれた。

そしてそのままレイナの方を向き、自信満々に

「それじゃあ第二ラウンドと行こうか!!」